
元々読者で今オリ主！？

家から出ない風来坊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元々読者で今オリ主!?

【Nコード】

N3721V

【作者名】

家から出ない風来坊

【あらすじ】

この小説の主人公は、皆と同じく読書が好きなフツの学生。今日もあるサイトで二次創作を読んでいた。ジャンルはオリ主物。そして今日も小説の作者「THE・神様

」に感想を送る。「この世界に入っていつてオリ主と背中を合わせたいwwモチロンチートww」返信を見ると、そこにはこう書かれていた。「良いのww逝ってみるか?ww」

これは、何とはなしに返した言葉によってその二次創作の世界にトリップする事になった青年の物語 *** (仮)を外しました*

*
*

Version 0.1 - プログラマーのための 1 - (前書き)

初めまして！

いきなりですが、どうぞ！

ん？んん！？

ココはドコだ！？

一面真っ白、壁も床も天井も、シミ一つ無い、正に驚きの白さと言
えるほどの真っ白な部屋

俺はその部屋の真ん中？に居た。（何しろ白すぎて、ソコが壁な
のか、それともまだ部屋が続いてるのか判りやしないんだ。）

そして声が今まで聞こえてきていた方、つまり左側を見る

そこには二つのエベレストを所有する、銀髪を膝裏まで伸ばした、
碧眼のとても美人な少女が居た。

・・・背中に羽の生えている者も美【人】にいれるとするならば、
だが。

目を擦る 見る

も一度目を擦る 観る

頭を叩く 視る

・・・。うん居るね！！

ってかさっきのゆっさゆっさって胸の音だったりしてww・・・
リアルに鳴るれうゝゝえるです。ハイ。いやはや眼福眼福！

所で・・・さっきの・・・チュッって・・・音は・・・まさか！？

「き、キキキキッ、キス？」

「ハイ！鱧です！！！」と、魚を取り出しながら言う天使さん

ああ、良い笑顔だ。俺のファーストキスがこんな美人だなんて。
・・・癒される。て、アレ？

「ん？キス？」と、俺

「はい、鱧。」天使さん

「k i s s ?」俺

「鱧。」天使さん

「キス？」俺

「鱧。」天使さん

「鱧。」俺

「k i s s ?」天使さん

「キス！」俺

「キス！！」天使さん

では早速！！！！

天使さんに飛び掛かる俺

悲鳴を上げる天使さん。なんで？

と、その時

『お〜い！その辺にしておけ〜。』

ドコからか謎の声が響いてくる

「ダレだ！！邪魔するヤツは！！」

思わず戦隊ヒーロー物の悪役のような反応を返してしまった・・・。

Orz

と、俺が落ち込んでいると。

『なんだかんだと聞かれたら！！』どこからか響く謎の声。

「答えてあげるが世の情け！」と、舌つ足らずな声で話す天使さん。

『世界の破壊を防ぐため』

「世界の平和を守るため」満面の笑みの天使さんカワイイ。

『愛と真実の神を貫く、ラブリー・チャーミーな審判役、！』

「！」

『世界を統べる絶対神のふたりには！』

「ビッグバン、迷える仔羊が待ってるぜ！」

言い終わった後コチラを視てくる天使さん

ワクワクとでも言い出す「ワクワク」言いやがった

(これはアレか？ 俺に続きを言えと言ってるのか？)

コクコク

(あ、ちくしょうココロ読まれた)

よし言つよ！言えば良いんだろ！？

「……にゃーんてにゃ。」

「やった〜！！初めて成功しましたね！」

『そっだな〜！』

「……ちよっといいだろうか？」

『「なん(じゃ?) (ですか?)」』

「いや色々と聞きたいんだけど……。」

『ああ、ちよつと待った!』

その言葉と共に目の前に扉が床から生えてくる様に出て来る

『その扉を潜つてコツチに來い。』

(なるほど、この扉がこの謎の声のヤツが居る所に繋がっているのか。)

俺はその扉のドアノブを握りしめた

突然だが、俺はそのとき、コレは夢だと確信していた。

だってそうだろう? 真っ白い、すぐそこで終わっているようで、何処までも続いているような部屋に、背中に羽の生えた天使、床から生えてくる扉、どれ一つ取った所で現実味が無い。

そう、そんな事は、

<<ダレかが描いた物語に、その物語の読者が飛び込んでいく>>
セカイ
ぐらいに信じられない事だ。

だから、俺は。

軽い気持ちで、握りしめたドアノブを回し、

扉の向こうへと、

踏み出した。

どうせ夢なんだ。夢の中でくらい羽目を外しても、

いいと思わないか？

side out...

Version 0 - プロローグその1 - (後書き)

実はコレ、最初に出してたやつの中からなんです。

しかし、感想でアドバイス？(オイ を貰い、

こういう風になりました。

そう！コレは一度手を加えたもの！

しかしこのクオリティ！！

・・・orz

そんなわけで、応援の感想、批評の感想、両方とも大歓迎です。
ジャンジャン送ってね！

Version 0.1 プログラムその2 - (前書き)

コメントって貰うとうれしいね！

ただし応援コメに限る

もちろん批評も受け付けてますがWWW

Version 0 - プロローグその2 -

Side 裕士 IN・???

扉を潜ると、辺りに眩い光が迸り、とても目を開けていられなくなる。

だが足場はあるようだ。

俺はじりじりと少しずつ床に足を滑らせていく
前にも床があるコトを確認すると、意を決して一歩前に踏み出した！

その後、

体を支配する浮遊感に俺は背筋が凍る

(まさかこのまま地獄に直行!?)

(ヤバッ、じゃ、じゃあさっきのヤツら悪)

そして俺は落ちた

前に

「魔ああああああああつ!?!?!?」

ガスンッ!!!

そんな豪快な音を立てて俺は顔面から着地した。

『うわあ……。』
「痛そうデス……。」

と、聞こえてくるのは天使さんの声と、先ほどより随分とクリアになった、謎の声だった。

「うあああああ！！！！いつてえええ！」
俺は耳の横まで床に埋まっていた顔を抜き、叫びながら左右に振る

「あ、あの〜大丈夫ですk・・・ひいつ！」
俺が天使さんの方に顔を向けると、なぜか悲鳴を上げる天使さん

『オ〜イ。お主鼻、鼻』

その声に気を引かれ顔を向けると、
<<フリルのたくさんついた、いわゆるゴスロリに身を包んだパツ
キン美女が居た>>

「ジ〜〜〜〜〜〜〜〜」

『ブルブルツ』

『ええい！鼻血を出したまま締まらない顔をしてワシの方をみるでない！』

美女は俺の視線に身を震わせ言ってきた

あ、俺鼻血だしてたのか。

「って、お前のせいだろ！！」
俺が振り向くと思った通り、壁から扉が生えていた

「何で壁に扉生やすんだよ！フツーに床でいいだろーが！」
『だが、鼻血だしたままコツチを視てくるのはさすがによせ。キモ
i・・・解った！解ったから！！泣くのはヤメロ！！鼻水に鼻血
が混じって地獄絵図じゃから！！！！』
.....ホントか？

『ううう・・・ま、まあ確かにワシが悪かった。頼む、許せ。』
うう、仕方ない

(『なんでワシが謝らないといけん「なにか言った？」いやなんで
も無い』

(「」　さま、そろそろ説明した方が.....」)
天使さんが偉そうな女に何か言っている。
『そ、そうじゃな。』

『ええ、コホン！』うわっ、古ッ『うるさいッ!!』
顔を真っ赤にして怒ってきた。なんだ、こうしてみると結構力ワ
イ.....

「ニヤニヤしてんのキモイぞ。」
『ええい！ほっとけ！ツてか説明させる!』
むう、俺には言っておいて.....って説明？
「何の？」

『トリップの事に決まってるおるじゃろっ!』

ああ、とうとう俺は夢の世界まで二次創作に犯されたか.....
なんだか、感慨深い物があるなあ

『否、夢じゃないからの？現に、さつき痛さを感じたろっ?』
いやでも最近の夢はスゴイらしいよ〜？
『なんじゃ最近の夢って』

「うっ、この下から舐めるように観る夢があったんだよ……。
『待て!!お主さんのハナシをしておる!!?』
最近夢で観た、「実録!パンダの優雅な一日」だけど?

『……。少し観てみたい気がする。ってそんな事より!』

「事より?」

『オマエ、サイトで二次創作観てるじゃろ?』

「ああ。」

『ソレの作者、ワシ。』

・
・
・
・
・

「は?」

『たっぷり取ったのう。まあいいもっ一度言っぞ?あの小説の作者、ワシ。』

「ププププ!アレをオマエが書いてるだど?あんな面白い話、オマエに作れるわけがない!」

『どっしよう?。嬉しいんだけどコイツむかつくどっしよう?』

「まあまあ」

さま押さえて押さえて。私が説明しますから。」

『そうか?』「是非才願イシマス」『なんじゃこの態度の差は……』

「やっぱり胸なのか?そうなのか?とorzポーズで落ち込んでいる
パツキンに、

とびつきりの笑顔とサムズアップを送ってあげた。

『WRYYYYYYYYY!!!』

おお、なんか暴れ出した!

「アツチは放っておいて、説明をしますね?」はい!!

「先ず貴方はあの小説を読んでいましたね?」

ええ! 何度も感想送る程の大ファンでした。

「それが作家さんも貴方をだんだん気に入っていったんです。」

やったね! 夢でもスゲー嬉しい!!

「フフ、そうですね……。そこで問題です!」

なんですか?

「貴方は今日、感想でなんと送りましたか?」

「ええ〜っと、たしか……。そうだ! 【この世界に入って行って主人公と背中を合わせて戦いたいwwwモチロンチートwww】って書いた!」

「ハイ、正解です。よく出来ました!」

「そしてその返信で、【この世界に逝く/行くかどうか】聞かれ、そして貴方は行くと答えた……。」

ウンウ……、
ン?

「そしてその後設定なんかを聞かれた。」

……。まさか?

『イツエ〜ス!! その通り! それが今日有ったことなのじゃ!』

そこでワシはお主を気に入っていたし、面白そうだとおもったのでお主ならと思いつれてきた!』

戻ってきやがった。って!

「それほんとかよ!」

『「ホント(じゃぞ?) (ですよ?)」』

じゃ、じゃあ証拠は!?

『ん、強いて言うなら……。会話?』
『どういう意味だ?』

『お主、作者と設定決めてる時、一度でもキーボードに触れたか?』

「あ……。あああ!?!?!」

『思い出したか。そういう事じゃ。』

じゃ、じゃあホントにあの話の中に……。

『行けるぞ』

「い、いい……。」「

『どうした?まさか……。いや、なのか?』

若干不安そうに聞いてくるTHE・神様
いやどころか

「いいいいやあああつたあああああ————!!!!」

大歓迎だぜ!!

『……。フフフ、そうじゃな!何せワシが作った物語^{セカイ}じゃもの
な!?!?!』

一瞬ポカンとした顔をしたあと満面の笑みを浮かべるTHE・神様

その後色々と設定を確認し、いよいよ出発の時間がやって来た

床から扉が生えるように出てくる。

『その扉をくぐれば、ムコウ。。。に繋がっている』
オレはドアノブを握りしめる

「気をつけていつてきてくださいね〜！」
にっこりと笑う天使さん。

『いつも覗いておるからな！』
コチラもいい笑顔だ。

「あ！」

重大な事を思いだした！

『なんじゃ！？やっぱり嫌なのか！？そうなのか！？』
悲しそうな顔で聞いてくるTHE・神様

そうじゃなくて、
「主要キャラクターの記憶は持つて行けるようにしてください。」
じゃないと、

「せつかくの先生オリジナルキャラクターですからね〜！」
『。。。ああ〜！〜！』

オレはドアノブをゆっくりと回し、扉を開く
『じゃあな〜！逝ってこい〜！〜！』
オレはその言葉に笑いながら、

「字が違う〜！〜！」

光の渦の中に、進んでいった。

S
i
d
e
o
u
t
.
.
.

V e r s i o n o . プ ロ ロ グ そ の 2 . (後 書 き)

ふう・・・あ、へんな意味じゃないですよ!?

次回はいよいよ(???)の世界に突入?

Extraversion - 小話 - (前書き)

この後に出す話が二つあるんだけどどっちがいいんだろう・・・？

あ、小話どつぞー！

Ex t r a V e r s i o n - 小 話 -

「そっだ！THE・神様！！」

『ホホウ、様までつけるとは、中々信心深いやつじゃのう！
で？なんじゃ？』

「サイン下さいッッッッ！！！」

オレはその言葉とともに深く腰を折っていた。

『おおふ。』

アレ？固まった？

チラリと天使さんの方を向いてみると、

（「大丈夫、嬉しくなって固まっちゃったんだと思います」）

と、言う声が頭に直接響いてきた。

そっか。そんなに喜んで貰えてるのか。

『そ、そそそそ、そうじゃな！よかるう！サインをやるう！』

その言葉とともに色紙が降ってきた

やった！作家さんのサイン貰っちゃった！

・・・アレ？

『どうしたのじゃ？』

「字が読めないんですけど・・・？」

しかし、色紙にはミミズの這ったような字が……。

『ああ、ソレはアレじゃ。お主の頭じゃ、その文字が認識出来んからじゃよ。』

「え？何ですか？」

『知らん。でも、今までワシやそいつの名前をいっても、お主には理解出来んかったじゃろ？』

いいながら天使さんを指すTHE・神様。

ああ！あの　　とか　　ね。てっきり権利の問題とかかと思ってた。

『「それもある！（あります！）」』

マジかよ……。

Extraversion - 小話 - (後書き)

ううん。。。。

話の順番悩む。。。。

Version 0.5 - もう一人の主人公その1 - (前書き)

正直、書いててイヤになった章。
見るの？

じゃあ……、
どうぞ。

Side???. IN.???

俺はいつもの様にレベル上げついでに小銭を稼ぐ為、ギルドでクエストを受注した。

クエストの内容はこの層でも中堅くらいの強さのモンスターを二十匹倒すこと。

まあ、そのモンスターでも俺にかかればイチコロなだけだな。

「あ、あのっ!!」
ん?

「あの、すみません! グラブさんですよ・・・ね?」

「ああ・・・。 そうだが、君は?」

声が聞こえてきた方をみれば、女の子が1人

髪はショートボブで顔はまだまだ幼い感じの残る童顔。

中学二年生といったところだろうか?

防具は上から下まで同じシリーズの物で、防御重視の装備だが、このフロアのモンスターを相手にするには、少し心許ない。

「わ、私はリアと言います!」

「そうか。 で? 何のようだ?」

「あの、その、ええつと・・・。」

指と指の先を合わせたり、離れたりと、アッチコッチに視線を向けながら、煮え切らない態度を取る少女

「なんだ。用がないなら俺は行くぞ。」
「その、私とパーティを組んでくだ「いやだ。」さい!!・・・ええっ!?!」
「何ですか!!」
いちいち説明してやるのも面倒だが、この手の奴はちゃんと言い聞かせないと諦めない。

「はあ。・・・先ず君は下のフロアから上がってきたばかりだろう?」

「・・・はい。」 シュンと頂垂れる少女

「大方、俺のクエストに着いてきて、経験値でも掠めようと思ったんだろう?」

「そつ、そんな掠めるなんて!!」

「それでなくとも、俺は自分よりも弱いヤツとパーティを組む気はない。」

自分より弱いヤツを連れていき、ソイツがへたうったら、オレにまでケケンが及ぶかもしれんから な。」

あくまで冷徹に冷静に突き放す。

「で、でも!!貴方のレベルだったら、私1人ぐらい守れるでしょう!?!」

「かも知れん。しかし、そんなことは関係無い。」

「何ですよ!!」少々冷静さを欠いているな・・・。

「俺は、死ぬのが、怖い。」

「私だつてそうよ!」

少女の絶叫にギルドの中に居た他のプレイヤー達が静まりかえる。

「だから、リスクは最低限に迄落とすんだ。」

もしオマエが敵に殺されてみる。

俺には何の問題も無かったのに、そのせいでクエストが失敗に終わり、俺は死ぬかもしれない。

もしオマエが犯罪ギルドの一員だったとしたら、俺はモンスターの前に丸裸で放り出され、死ぬかもしれない。」

犯罪ギルドとは最近話題になっているギルドの事だ。

一般プレイヤーをステータス異常などで行動不能にし、その間に強引に装備やアイテム、金を奪い、無防備な状態でモンスターの前に放り出す。

後片付けはモンスターがやってくれると言うことだ。とても同じ人とは思えないことをする。

・・・いや、普通だったら、これも当たり前前の事なのかもしれない。

なぜなら、そのプレイヤーは無事スタート地点に戻り、悔し涙を流したりするんだろう。

普通だったらな・・・。

そんなモノと同じに考えられたからなのか、少女は震えている。

しかし、俺に関係はない。俺は足早にギルドを去る。

後ろで、

「グラブのヤロウ。ちょっと強いからって、天狗になってやがる。」
とか、

「ねえ、貴女、私とパーティくまない？大丈夫守ってあげるから。」
など聞こえてくる。

ギルドを出て路地裏に入った所で俺は壁に手をついた。

「・・・クソツッ！俺だつて助けられるもんなら助けたいんだよ・・・
！」

そう、俺だつて人並みの良心はある。しかし助けられない。

<<死ぬのが怖い>>からだ。

察しのいい人は気付いているだろうが、

<<これは、ゲームだ。遊びでしかない。>>

そう。ゲームだ。たかがゲームの中で死んだからといって、なにを恐れる事がある？

経験値の喪失か？ いや違う。

自分が死んだ後、ランダムに手持ちからアイテムをドロップ（落とす）する事への心配か？ いや、それも違う。

それは、

<<本当の意味での死>>

だ。

言っている意味が分からない？

俺だつて解らないさ。

<<ゲームで死ねば、セーブ地点に戻り、再び再開する。>>
当たり前の事だ。

しかし、それが普通では無くなった。

今から二年前の、2022年のあの日、あの瞬間から・・・
全てが終わり、
そして全てが始まった。

・
・
・

V e r s i o n 0 . 5 - もう一人の主人公その1 - (後書き)

この次の話が・・・

あ、

読んでくれて有難う。

V e r s i o n 0 . 5 - もう一人の主人公その2 - (前書き)

今回は友人『琴羽卓己』様の自宅からお送り致します。

この人も書いてるからユーザー検索してみてね

では鬱章と呼んでいる話を

どうぞー！

Version 0.5 - もう一人の主人公その2 -

SideグラブIN・クエストに行く道中……。

2022年、とある大手電子機器メーカーが「ナーヴギア」という、ヘルメットの形を取った、仮想空間への接続機器を開発したことで、世界は遂に完全なるバーチャルリアリティを実現させた。

俺はこのナーヴギアを使ったVRMMORPG「ソードアート・オンライン」のプレイヤーである。運よくベータテスターに選ばれ正規版も購入した俺は、正規版SAOの世界を満喫するのであった。

しかし、そんな感動も束の間、俺はベータテスト時には確かに可能だったログアウトができないことに気づく。混乱の後、ゲーム開始地点の広場に転送された俺は、ログインした1万人のプレイヤーと共にゲームマスターから恐るべき託宣を聞かされる。SAOのゲームデザイナーである茅場晶彦の名を名乗ったその男は、淡々とこのデスゲームのチュートリアルを開始する。

曰く、ログアウトができないのは仕様であり、SAOの舞台「インクラッド」の最上部第百層のボスを倒してゲームをクリアすることだけがこの世界から脱出する唯一の方法である。

そして、このゲームで死亡したり、現実世界でナーヴギアを強制的に外したりすれば、ナーヴギアから高出力マイクロ波を発せられ、脳を破壊されて死ぬことになる。

2年後、インクラッドの最前線は七十四層。プレイヤーの数は、

6000程にまで減っていたが、俺は何とか生き延びていた。

・・・と、言うのがコチラのセカイでの俺の設定。

この「コチラ」というのは、ゲーム（ヴァーチャル）とリアル（現実）と言う意味では無い。

その二つともを引ってくるめた意味でのコチラだ。

まあ簡単に言うと、だ。

俺は転生したんだ。

俺は・・・いや、僕は前世ではよく言えば生真面目な、悪く言えば面白味の無い人間だったらしい。

らしい、というのは自分ではそう思わなかったからだ。

まあそんな事はどうでもいい。

僕は確かトラックに引かれそうな子供を助けて代わりに死んだ。

その先では髭もじゃの、いかにもな神が待っていて

「オマエの自己犠牲の精神は素晴らしい」
だとか、

「褒美代わりに転生させてやる」

とか言っていたので、僕はその時嵌っていたラノベを思いだし、

「じゃあ、『ソードアート・オンライン』の世界に、努力すれば最強になれる程度のステータスを持たせて行かせて下さい。」

と言った。

その後はトントン拍子に進んでいき、僕はレベルとスキルの熟練度が通常の2倍の速度で上がって行くという、反則級のスキルを持ち、無事『ソードアート・オンライン』の世界へ飛び込んだ。まあ、一巻しか持ってなかったんだけど・・・。

その時、僕は浮かれていたんだ。憧れのラノベの世界に行けると。

しかも、こんな反則級のスキルまで持って。

しかし、現実はことごとく僕を裏切った。

まず、茅場晶彦の説明を聞いた後の広場は地獄絵図だった。悲鳴を上げる者や、走りだす者、大声で汚い言葉を喚き散らす者果ては隣のプレイヤーに掴みかかる者さえ居た。

(うーん？まあ帰れない知ったんだし、これくらいは普通か？)

僕は特に気にすることもなくその場を離れた。

その数カ月、僕は知ることになる。人間というモノの本質を。

その時僕はクエストで森に来ていた。

内容は食用キノコ取り。奥深くまで行く必要があるらしい。

まだ昼前だと言うのに暗い森の中で、僕はキノコを見付けた。

「お！有った有った。コレだな。」

キノコの数を数える。

「一、二、三、四・・・後一つか。」

僕はその辺りをキノコを探して歩き回っていた。

「ぎゃあああああああ・・・。」

そして、不意に悲鳴が聞こえ、僕は思わず這い蹲っていた。情けないって？仕方ないだろ。死ぬかもなんだぞ？

だが、その時の僕の危機感など、有って無かった様なもので、僕はその姿勢のまま、悲鳴の聞こえてきた方へ這っていった。

ソレはどうやら、茂み向こうから聞こえていたようだった。というのも、今は間隔が狭く、そして激しい呼吸の様な声に変わっていたからだ。

僕は溢れてくる好奇心に負け、その茂みの中に顔を突っ込み、そして、

視た。

いや、視てしまった。

ソコには男が転がっていた。いや転がされていた。

そしてその男の目の前にはモンスターが一体

名前は知らないが、目が無い、紫色に滑るモンスターが居た。

僕はその光景を視て、思わず身じろぎをしてしまった。

ガササツ

僕の体が茂みに中り、音が出る

そして、男はその音に気付き、コツチを視た。

しかし、幸いモンスターは聴覚が弱いらしく、コチヲを視てはいない。

「た・・たたたたすけて・・。」 カチカチカチ

とても小さなその声は、ナゼか僕の耳にハッキリと届いた。

男の顔は汗に涙に鼻水、ヨダレさえたらしていた。

僕はその時疑問の思った。

どうして男はこんなに震えているのに逃げないんだ？

男の体には麻痺状態を表す帯電も見られないし、縄で縛られていると言っこともない。

ならば、ナゼ？

男は僕の疑問に答えるかのごとく、視線を自分の体に向けた。

震えて歯を打ち鳴らしている男の視線の先には、本来有るべきものが無かった。

右腕、右足、左腕、左足。

男は四肢を失った、ダルマの様な姿でそこに居た。

「~~~~~ツ!!!!!!」

僕は危うく叫び出しそうになった。

しかし、幾ら音に鈍いといっても、叫んだりしたら気付かれるだろう。

そのとき、モンスターが動き出した。

そして、

ガバアアッ

大きな口に鋭利に尖った歯がモンスターの丁度真ん中ぐらいから現れた。

そこから先はスローモーションだった。

モンスターの口から唾液が男の顔に垂れる。

男は僕に助けを求めるように見る、しかしもう間に合わないと思うと、僕に向かって、叫んだ。

「おい！ソコにいる茶髪の男！！オマエのせいだからな！！！！オマエが助けてくれなかったからだ！！！！」

そういつて僕に非難と憎悪、蔑みの籠もった目を向けてきた。

そして男は、

バグンっ！

丸飲みにされた。

・
・
・

V e r s i o n 0 . 5 - もう一人の主人公その2 - (後書き)

鬱だでも死なない。

読んでくれてありがとう・・・。

Version 0.5 - もう一人の主人公その3 - (前書き)

今回、あの人達が出てきます。

口調がおかしいかもしれませんが、作者はこの人の口調は知りません。

なので気づいた人は、おかしい部分と、訂正後の口調をよろしければ感想で頂ければとおもっています。

では、

どうぞッ！

PS 前話で出てきた、クラブが神様から貰った能力を変更しました。

Side グラブ・IN 過去の森

男が丸飲みになれ、モンスターが消えた後も俺は同じ場所に居たというより、その場から動けなかった

あんなショッキングな場面に出くわした事もあるが、なによりも、男に言われた事の方が頭に残っていた。

(俺の・・・せい？)

・・・違う。俺のせいじゃない！俺は何もしていない！！

俺はココでただ見ていただけなんだ！俺は何も悪い事は・・・)

ガサツ ガサガサ

そんな事を考えていた時、三人の男がやって来た。

1人目は赤く光る目をもつ男、2人目は変なマスクをしている男、

三人目は背の高い、線の細い色男だ。

「見ました？あの怯えよう！」

マスクの男が奇妙な笑い方を始めた。

「そうだな。鼻水垂らしてたぞ、アイツ。」

もう1人の色男も同調し、笑い始める。

しかし、赤目の男は黙ったまま、何かを考えている

その様子に気付き、マスクの男は笑うのを止め、赤目男に問いかける。

「どうかしたか？ザザ。」

「いや……。男が喰われる時に、何か叫んだような気が……。」

「あ？そんな声聞こえたか？」

「ああ。」

「確か……。『おい！ソコにいるちゃ・男・オマエ・せいだ・。！！！オマエ……。か　っ　体！！！！』って聞こえた。」

「ソコにいる？わざわざ手足切ってこんな森の中に連れてきたの？？」

その瞬間、俺の体が跳ねた

「ソレにちゃ男？どういう意味だ？」（ガサツ）

バクバクバクバクバク

俺の心臓がうるさいほど音を立て脈打っている。

ヤバイ、気付かれたか！？

……。……。息を殺し男達の様子を窺う。

「さあな。」

良かった。マスクの男と上手く被ったのか、今の音は気付かれていないらしい。

「……。まあいい。オレの聞き間違いかもしれん。」

「……。そうか。なら隠れ家に戻るぞ。」

「ああ。」

「了解ッス、ヘッド。」

男達が元来た方向へと戻っていく
ガサガサ ガササツ

「……………ふうっ」

男達が消え、たっぷり五分ほど、俺はその場を動かなかった。

男達が言っていた事にも興味はあるが、今はもう、ホームとして使っている宿に帰ってベッドに寝転がり、今日見た事を全てを忘れてしまいたかった。

宿に戻り、動かなかったせいで冷えた体を、熱いシャワーで温めるのだ。

(そうすれば全ては元通り。今日見た事なんか、すぐ忘れてしまっ
さ……………)

あの男には悪いが、この世界では人が死ぬなど日常茶飯事である。そして今更クヨクヨと悩んでも、何も変わりはないのだ。

そう思って、いや……………自分に言い聞かせて、日がすっかり落ち、さらに不気味さを増した森の出口へと重たい足を交互に出し、進んでいった。

……………本来招いた覚えのない、三人のお客を引き連れて。

Sideクラブ・宿

部屋に戻った僕は、シャワーを浴びていた。
火傷するかと思う程熱いやつだ。

シャワーと共に、あの惨劇を洗い流そうとしていた

しかし其処にノックの音が聞こえてきた。

仕方なしに僕はシャワーを止め、部屋着を装備して、ドアへと向かう。

その間もノックは続いている。　どうやら相当気の短い奴の様だ

(僕の知合いに短気な人なんていたかな?)

多少怪しみながらも、ドアを開ける僕。

「Hai、さっき振り、かな? 『茶髪の男』クン?」

其処には、ついさっきまで一緒にいた、線の細い色男がいた。

「ッ!!!...何の、事ですか...?」

驚愕の表情を瞬時に押し殺す。

しかし、男は解っているとばかりに笑っているだけ。

(どうしてここがバレた! ?)

いやそれより、今の声は、確信を持っていた! ! ? なぜ? まさか聞こえていた? !)

「なんでこんなに自信があるんだ? !、って顔だな。」

それは君が上げた音と、『アイツ』が言った『言葉』の御影さ

「言、葉・・・?」

「そっ。」

君に殺された、あの男の、ね。」

「僕が殺した・・・だと! ? 殺したのはお前達だろうが! ! !」

しまった! これでは自分からあの場所に居たと教えているようなものじゃないか。

しかし、男は気にした様子もなく、話続ける。

「君はどうなんだ?」

「僕は何もしていない!」

「そっだ。何もしていない。」

「だったら、何もせず、見殺しにした。」

「ソレって・・・オレ達と何か違うのか?」

「! !」

『ただの屁理屈だ。』

その一言が、俺には言えなかった。

男はなおもしゃべり続ける。

「アイツも言っただだろ? 『おい! ソコにいる茶髪の男! ! オマエのせいだからな! ! ! オマエが助けてくれなかったからだ! ! ! ! !』
って。」

アレはな? 『どうせ俺が死ぬんだったら、コイツも道連れにしてやる!』って意味で言っただだぜ?」

信じられなかった。信じたくなかった。でも、あの時のアノ男の眼が何度も蘇る。そしてその眼は、確かにそう言っているようだっ

た。

「アイツが何も言わなけりゃ、巻き込まれないですんだのにな・・・

」
男は囁く様に、言った。

「なあ・・・人殺しクン？」

「う・・・うわあああああああああああああああああ！！！！

！！！！」

・

・

・

Version 0.5 - もう一人の主人公その3 - (後書き)

行をあんまり変えていないのは、プーの話し方を再現したかったから。

うん、こんな方法しか思い浮かばなかった作者を許してね？
色々おかしいと思うでしょうが、作者の頭じゃコレが限界。

感想でももらえたらなー。(チラツチラツ)

待ってます。

Version 0.5 - もう一人の主人公その4 - (前書き)

うん。。。。

なんだかイマイチな気がするクライマックス

手直しするかもです。

しないかもです。www

ではでは張り切ってえ〜！

どうぞ！

Side グラブ・IN 過去の数日後

その後、気が付けば男は消えていて、シャワーで暖まったハズの身体も冷えてしまっていた。

僕は部屋の中に戻り、備え付けのベッドで寝ようとした。

しかし、脳内でさっきの色男と、アノ男の言葉がリフレインする。

『何もせず・・・見殺しにした。』

『ソレって・・・オレ達と何か違うのか？』

『おい！ソコにいる茶髪の男！！オマエのせいだからな！！！！オマエが助けてくれなかったからだ！！！！』

『なあ・・・人殺しクン？』

「・・・違う。僕は人殺しなんかじゃない。」

暗闇の中で聞いた声は、とても頼りなかった。

それから数か月の間、俺はひたすらクエストに出ている。

採取系や運搬系じゃなく、全てMobを倒す討伐系だ。

あの時はホームにしている町の周りのモンスターを全て独りで狩

り尽くして、一人でもモンスターによる犠牲者を減らそうと躍起になっていた。

もちろんプログラムによって調整されているモンスターポップが減るハズもなく、いくら神様からもらった反則スキルがあるといつても、日に日に疲労が溜まっていき、

更には他ギルドからの自分達がレベル上げが出来ないとの苦情が出たりと、僕は参ってしまった。

さすがに僕でも悪口を言われるのには慣れていなかったため、ケン力になった事もあった。

そのうち、一人称が『僕』から『俺』に変わったりと、少しでも自分を強く見せようとしていた。

そんなある日、いつものようにクエストを終えてカウンターで独りで飲み物を飲んでいる時、彼女が現れた。

「あの・・・、ちょっといいかしら？」

「ん？」

俺が振り向くとそこには、この層より一つ下の装備に身を包んだ、炎の様に真っ赤な髪をした一人の女がいた。

「誰だ？」

その時既に俺は他のプレイヤー達から嫌われており、俺に声を掛けてくる者など、嫌味を言う奴ら以外居なかった。

「ええっと、私はロザリア。三日前にこの層に上がってきたの。」

「そうか。だが俺に何の用だ？」

「実は見ての通り、私あまり強く無くって、この層のモンスター相手でも苦戦しちゃうくらいなの。」

「それでどこかにいい先生がいないかななんて思ってたんだけど、昨日貴方が一人でクエストをこなしているのを見て、この人だ！って思ったの。」

「それはつまり・・・、俺に戦い方を教えてほしい、と？」

「ええ。」

頷くロザリア。

（困ったな・・・。今はモンスターを減らすのに忙しいし・・・。）
「それは・・・俺じゃないといけないのか？俺以外にも強い奴はたくさんいるんだから「ダメ！貴方がいいの！！」「うお・・・そうか」

話の途中で割り込んできたロザリアに若干気押されながら、俺はこう考えていた。

（俺じゃないと・・・だめ。）

他人に頼られるなんて何時ぶりだ・・・？

ただ、悪い気は・・・しない、な。

・・・・・・。）

「わかった。君の先生になろう。」

「ホント！？ ありがとう！！！」

ロザリアは嬉しそうに笑っていた。

それからの毎日は楽しかった。

ロザリアは筋が良く、この層のモンスターなど一か月もたたずに倒せるようになったし、俺と戦って、俺が負けた事もあった。ある日など、一度もダメージを与えなかった。

『ねえ、このモンスターの討伐クエスト、一緒に行ってくれないかしらっ?』

『貴方。』

あの、さっきのクエストで私の事を助けてくれたわよね?

その・・・あ、ありがとう。』

『この間のお礼に一緒に食事でもどうかしら?』

モチロン、私の奢りよ。

・・・あ、でもあんまり高いのは遠慮してよね?』

『ねえ、グラブ?』

ちよつと今おながが減ってるんだケド、お財布がすつからかなの。

奢ってくれないかしら?』

『ちよつと、グラブ!』

貴方、部屋ぐらい整理したらどうなの!?

足の踏み場もないじゃない!!

手伝ってあげるから、一緒にしましょ?』

『ふふん、どう?』

少なくとも貴方の作った料理よりはおいしいでしょうっ?』

『あ、あのアクセサリいいわね。』

『……ここで何も言えないから貴方はダメなのよ。
分かってる？ グラブくん。』

『グラブ、貴方そんな事してたら女の子にモテないわよ？』

『グラブ、さっき女の子と話してる時、ずいぶん嬉しそうな顔して
たわね……？』

『ただ道を聞かれただけじゃない……。』

『ようやく女性にプレゼントを送るって事を覚えたのね、グラブ』

『……グラブ……グス……心配、させないでよね……ヒック……』

そんな日々の中で、俺は彼女に惹かれていった。

そしてやってきた2023年のクリスマス、丁度零時に、俺は結婚してくれないか？とロザリアに問いかけた。
アイテムの結婚指輪をロザリアに突き出して。
世間は蘇生アイテムなんかの話で盛り上がっていたが、俺にはこ
っちのほうが重要だった。

勿論実際の結婚などではなく、アイテム欄の共有なんか起きる
だけのものだったが、俺は本気だった。

俺の問いにロザリアは、泣きながらその指輪を装備してくれた。

俺はロザリアをそっと抱き締め、たとえなにがあつたとしても、君を守る、とココロの中で誓った。そしてそのまま幸せな新婚生活が始まる・・・ハズだった。

「あ！そうだ！」

何か思い出した様子のロザリア

「どうした？」

「いやあ・・・。今日買うハズだったクリスマスケーキを買い忘れちゃって・・・。」

また目じりに涙を溜めたまま、舌を出しながら言う

「そうか・・・。その店はどこに有るんだ？俺がとつてくるよ。」

「あ、そう？悪いね。」

「いいさ。」

俺はロザリアからその店の位置を聞いてケーキを買いに行った。

そのケーキ屋は遠かったが、イイ感じの店でプレイヤーが経営していた。

時間は既に三時を回っている。ケーキを受け取った俺は、急ぎ足で帰って行った。

妻が待っているハズの借家へ。

しかし俺を待っていたのは、元々備え付けの移動不可能オブジェクタだけのガランとした部屋だけだった。

「ロザリ、ア？」

いくら妻の名前を呼んでも、返事は返ってこない。

(攫われた！？ イヤそれはない。犯罪防止コードがあるからな。じゃあ何故！？)

俺は考えていてもわからないので、一先ず町に探しに出る事にした。

走る、走る、走る……。

妻の名を大声で叫びながら。

ただ無事でいてくれと、願いながら。

愛する者を探し、神から貰ったスキルで上げた身体能力で、ひたすらに走り続ける。

しかし、その声に応える声は聞こえない。

その願いも、叶える対象を知らない。

静まりかえった街の中で、

一人の男が愛する者を探し続け革製のブーツが石造りの道を走り回る音だけが響いていた……。

「ハアハアハア……。ドコに居るんだ……。ロザリア。」

町の至る所を走り回って探しても、妻はいない。メールを送ろうとしても、ダンジョンの様な場所にいるのか、メールを送れない。

空は既に白み始めている。

完璧にお手上げ状態だった。

(……。一度家に帰ってみるか。

もしかしたらサプライズって事もあるか……。?)

しかし、やはり俺を迎えたのは明りも何もついていない、カーテ

ンの閉じた、真っ暗な部屋だった。
壁際の机に座り、俺は考える。

(どうしたんだ、一体!! お前はどこに居るんだ! ロザリア!!
!)

と、その時聞きなれないアラーム音が響いてきた。

部屋にはもちろん音源の元になるようなモノはない。

ようやく視界の隅っこに、メインウィンドウを開く事を促す紫のマークが点滅している事に気づき、おれは指を振った。

光っているのは、妻との、ロザリアとの共通になっているハズのア
イテム欄だった。

(まさか! 助けをよんでいるのか!?)

俺は急ぎアイテム欄を開く。そこにはたった一つ、タイマー起動
のメッセージ録音クリスタルがあった。

明滅しているそれを取り出し、机の上に置くとクリックした。録
音されている音が流れてくる……。

まずきこえたのは、普段とは違う、荒々しい妻の声だった。

『よお、グラフ。 アタシの事を散々さがしまくってたなあ。

まったく、爆笑させてもらったよお前には。

あの必死な顔、笑えるったらありやしない。

どういう意味かわからない、って顔してるわねえ？教えてあげよ。

いいかい？アタシは、犯罪ギルドの一員なのさ。

アタシがある層でPKやってたころ、面白い噂をきいたのさ。

実力はある癖に、ノミの心臓を持つてるプレイヤーがいるってね。

そこでアタシは考えた。『そのプレイヤーにモンスターを狩らせ
として、その報酬を盗ったらどうだ？』ってね。

案の定、作戦はうまくいった。今までうまい汁を吸わせてもらっ
たよ。

その代わりに、アンタにもいい気分を味あわせてやったる？

でもそろそろキリがいいんでここらで辞めさせてもらっよ。

じゃあね。もう二度と会うことはないだろうさ。

いままで楽しかったよ。

・・・【人殺しクン】？』

俺は今聞いた事が信じられなかった。

あのロザリアがオレンジプレイヤーなハズがない。

どうせ性質の悪い冗談だ。

そうおもってアイテム欄を開くがソレは共有じゃなくなっており、状態を表すメインウィンドウにあったはずのロザリアの名は無く、そこには元から何も無かったかの様にただ空白が広がっていた。

「ハハハ……。ウソだ……。ウソだあああああああああああ
ああ！！！！！」

ん？ どうやら考え事をしている内にクエストの指定場所についたようだ。

その時、
「きゃあああああああああ！！！！！！」
どこかで聞いたような……。いやついさっき聞いた様な声が森に響いた。

その声は、少女というには、少女年を重ねすぎている声だった……。
そして声を聞いていたグラブは眉ひとつ動かさず事無く、言った。

「あの日から俺は、他人を信じるといふ事を、辞めた。」

S
i
d
e
o
u
t . . .

V e r s i o n 0 . 5 - もう一人の主人公その4 - (後書き)

やっと鬱章抜けれたね。

次回からは表に戻る気がするよ！

しかし、今回描写？にトライしてみたんだが全然分んねえ・・・。

後、書きためが凄い勢いで減っていくwww

元々の文字数が少ないんで統合した結果がコレだよ！！

Version 1 - 到着&逃走!?! - (前書き)

や、やっと・・・戻ってこれた・・・ゼ

それでは、

どろろ・・・(パタッ)

Version 1 - 到着&逃走!?! -

Side 裕土 IN・部屋?

涼やかな風がオレの体を優しく撫でる・・・。
オレは背中に丁度良い柔さの感触を感じる。
オレの瞼に光が当たっている・・・。

「ふああああ・・・ん。。ん？」

ええ〜つと、ココはドコだ? 確かオレは扉を開け・・・開け・・・
もうココは」 『のセカイ・・・か?』

そしてオレは気付く。

涼やかな風がオレの体を優しく撫でる・・・。
そつえば窓を開けっ放しだったな・・・。

オレは背中に丁度良い柔さの感触を感じる。
フム、これはMyベッドだな?

と言うことは、だ。

「オレの“神がオレの読んでる二次創作を書いていかもオレを
気に入っててくれてだからオレを」 『のセカイにスキル付き

トリップさせてくれる”なんて事はまるっと全部エブリシング・夢！

イツツア・ドリーム！！！！ってなワケね……。」

オレは眼を閉じたまま、息継ぎナシに一気に眩く。
なにこの厨二設定……。自分が哀れすぎる……。

「はあ……。あんな夢観た後じゃ学校行く気にもならねえ……。」
「何気に夢ン中で打ったハズの鼻まで痛いし……。」

「ああ！もういいや！今日は学校は休み！寝直そう！」
そしてうつらうつらしながら、
再びオレは気付く。

（オレ、電気は消したよね……？）

うあああああ！やっべえ！一晩中電気つけっぱとかマジ勘弁！電気代があああっ！？

しばしベツド。。。。の上で悶絶するも、潔く諦める事にした……。

（うつうつ……。ま、まあ良い（良くないケド。））
そんな事よりも、二度寝だ！二度寝！

幸い風の感じからしてまだ早朝、遅くても五時半位だ！取りあえず
昼まで寝るぞ！！

オレは電気を消す為に、だるくて持ち上がらない瞼を必死に開ける

（ああ、ダルい。瞼の上にデラックス的な何かが三十人程載っかつ

てそうだ……。両目だから×2、イバ物置でも潰れるぞこれは・
（・）

そして徐々に、本当に徐々にだが瞼が上がっていく
（ん……。眩しくて見えない……。）

そして眼が光りに慣れて来た頃、俺はこう言った。

「……。知ってる天井だ。」

何当たり前のコト言ってるのかって？

そう。

オレが観たのは知っている天井だった……。

ただの、なんの変哲も無い、いつも見慣れているハズの、天井
しかし、ソレは自分がいつも見慣れているものより、多少クリアに
見えた。

「天井は天井でも青天井は無いつて……。意味違っし……。」
オレは思わず顔をニヤけさせながら、言った。

どうやら俺がベッドだと思っていたものは青々とした草で、幸い背
中は汚れていない。

立ち上がって周りを見渡せば、ココは森の少し奥まった場所にある
開けた場所の様で、乱立する木々の向こうには赤や青、緑といった
カラフルな屋根が並んでいる。

「うん。まずは町まで行こう！」
俺は歩き出そうとした。

・
・
・
動けなかった。

いや、別にパイナップウみたいな髪をした忍者に影を縛られたワケじゃない。
もちろん、吸血鬼や、パッド長に時を止められたワケでもない。オレ認識出来ないしな。

簡単な事だ。

オレの目の前に、「全長が三メートルぐらいありそうな黒い狼が現れた」だけさ。

・・・アレ？オレ死んだ？

幸い狼っぽいのはコッチに気付いていないようなので、徐々に徐々に

にジョジョに、後ろ歩きで下がっていく・・・

そして念の為小石を拾い、正面、つまり逃げていく方向と逆の方向に投げる。

ガサッ

小石が木の葉っぱの部分に当たって音を立て、案の定狼は小石が落ちた方向を向き、歩いていく

(かかったな！ 狼ッ！

これが我が『逃走方法』だ… きさまはこのオレとの知恵比べに負けたのだッ！)

憧れのDIEO(丸だからな!!)のセリフをもじりながら、本気で逃げようと、後ろを向いて走りだそうとするオレ

パキッ

「・・・。」

あ、コレはアレですね。秘密の取引とかを見ちゃった人が逃げようとした時に鳴る、「この後のストーリーが簡単に解る音ナンバーワ

ン」の、
小枝が折れる音ですね。

「逃いいいげろオオオオ!!!」

「アオ~~~~ン」

オレの異世界生活一日目は、逃走から始まった。

早くも死にそうです。。。。

・
・
・

「ちょwww初回から逃走ってwwwwww」

「あらあら、だいじょーぶですかねー?」

「大丈夫じゃ。」

「何ですか?」

「アレ(・・・)は敵意を持つとらんし、なによりも・・・、」

「なによりも?」

「わしが見込んだ男じゃからのう!!!」

「あらあら、まあまあ!」

「ム、なんじゃ?」

「いえいえなんでも有りませんよ。」

「うん……、なんか気になるのう……。」

「ふふふ、なんでもないですー」

「なんじゃ、変なヤツじゃのお。」

・

・

・

Version 1 - 到着&逃走!?! - (後書き)

他の作者様がやってる、「オリキャラと会話とkやってみたいな」

あ、読んでくれてありがとね

・・・にしても短い。

V e r s i o n 2 - 餌付け大作戦！〜T・H・神様はおじいさんなのか？〜

副題で遊び過ぎた。

内容は詰め込みすぎた。

反省と後悔などこの小説を投稿した時からしている。

side 裕士 IN???

さて、突然ですがオレは今例の狼と向かいあっています！
頑張つて逃げてたけど追いつかれたよ……。

帰宅部の期待の新星とすら言われたオレがこのざまさ……。
狼……恐ろしい子……！！

絶対に目は合わせない様にしてるけどね！

だけど向こうはオレの事が大・大・大好きな様で……

「チラッ

狼」「ギンッ

(うわ、っべー。っべーんだけどこれ超見てるんだけどマジでっべー。)

こんな事になってます。

モテるなら女の子がよかつたな……(; ; ;)

モテるところか手も握ったことないけどな！！！

と、とりあえず手を振ってみるか！

コッチには敵対の意志は無いってことで。

フリフリ

パタパタ

あらカワイイ。耳動いてる。

・・・。

手を銃の形にして撃ってみる。人差し指と親指を伸ばしてそれ以外の指を曲げるアレだ。ついでに声に出していつてみよう。

「バーン」

ぱたん。

そんな音が聞こえて、狼は腹這いに寝そべっていた。クツ、カワユイじゃあないかこんちくしょうめツ！

これはアレだな、なんか渡せば仲間になってくれる。勘だけど。

絶対に手に入れてやる！

あ、でも戦闘して勝利したら起き上がって仲間にしてほしそうな目でこちらをみてきたりするのか・・・？

・・・ヨシ、まずは餌付けの方から試すか。

しかし何を渡す？

と、其処でふともものポケットに違和感。

不思議に思い、手をいれる。

あ、言い忘れてたけど今のオレの格好は、黒いタンクトップに黒い半ズボンだ。

初期装備・・・じゃなくて下着姿か？

やべえ、今までオレ下着姿でこの森の中走り回ってたのか・・・。
なんだかヘンタイみたいだな。。。

ていうかヘンタイだな！

誰にも会わなくてよかった・・・。

ポケットの中には、・・・マンガ・耳かき・リモコン・エネコン・
ライター・爪楊枝など e t c e t c ・・・。

某青ダヌキ並みに出てくる・・・が今はそんな場合ではないので
キニシナイ

オレはピンク色の扉っぱいのなんかミテイナイ。

みんなモキニシチャイケナイヨ？

とりあえず、今出てきたものを確認していこう。

マンガ うん。まごうことなきマンガだ。集〇社から小〇館ま
で、幅広いラインナップを取り揃えております。

耳かき あとでしょう。・・・生きてたら。

リモコン テレビあるの？

エネコン 誰もコマンド入力なんてしねーよ！覚えてないし！

ライター　じゃ勝てるわけないし……。
爪楊枝　言語道断!!!

それに……ウゝエル○ スオリ○ナル!?
なぜ特別な飴をここで……。

役に立つものが一つも無い……。

ほ、他だ!他はないのか!?
ん?紙の感触?お!飴についてる紙になんか書いてある。え、何
々?

『スポンサー。』

神様 パネエ！！！！

あの名作は特別な飴にささえられていたのか。ちよつとカンド。というか、二次創作のスポンサーって一体何するんだ？それとも神様の仕事の方か？

ハッ！まさかTHE・神様があの2525（二千五百二十五だよ。間違えないようにね）三大宗教が一つ、ヴェ○タース教が崇める神……！？

じゃあ、本体はおじいさんであの姿はこの世を忍ぶ仮の姿だとしても言うの……カッ！！！！

「イッテーーーー！！！！」

上からなんか降ってきた……。

あ、またヴ○ルターズオリジナ○か。しかも紙付いてる。てかデカイなこの紙！！

五メートル四方ぐらいあるぞ……。

えーっと、ナニナニ？

（今のは幻影だ。

オレはなんにも見ていない。オーケー？）

オレが必至に現実逃避しようとした時、その音は聞こえてきた。
ヒューヒュー、ヒューヒューと。

そう、まるで打ち上げ花火が上がる時の様な音だ……。

（どっかで祭りでもやってるのか？

もしくは今日なにかのイベントが有ってたり…？）

そしてオレは気付く。

「何か……音おつきくなってない？しかも……音が複数有るよ
うな……？」

ヒュー……ドゴンッ……！

そして揺れる足元

揺れの前に聞こえた方向に目をやると、

でっかいクレーターがあった。

「カアアアミイイイサアアアマアアア!!!????」
「ああおおおおお~~~~~ん!!!!????」
次々と落ちてくる小隕石《ヴェルタ〇ス〇リジナル》・・・。
逃げまどう俺・・・。
ついでに狼・・・。

この状況から逃れる術は・・・!?!?
そ、そうだ!!

「ふう、なんだか今日がいいことが有りそうだな
こんな生活が送れるのもTHE・神様が僕をこのセカイに送って
くれたからだなー。」

アリガトウゴザイマスカミサマー（棒）

THE・神様は褒められる(?)事に慣れていなかったはずだ!!

・・・いや、ちゃんと感謝はしてるよ?

小隕石《ヴェルタ〇ス〇リジナル》は・・・？
おおっ、やんでる！

「ふうっ〜…。」

「グルルル…。」

WA・WA・WA・WA・忘れてた！！！！
しかも神様のせいで怒ってる…。

……ってこんな事してる場合じゃないんだよ！！！！
これ……食うかな？

と、取り敢えずこの神様印のウゝェルタ スを、ブン投げる！！

「そおいつ！！！！」

オレの投げた飴はそのまま、狼の口めがけて……

口めがけて……

口めがけて……

「キャン！」

そして狼の額に中たった。

なんでそー、なるのっ！！！！（CV：萩本欽一）

「ゲルルルル・・・！」

うわぁ・・・さっきよりお顔が怖い。

（やばい！もう食い物が）

有ったわ。

ヴ ルター スオリジナ が湯水の如く溢れてくる・・・。

俺は飴本体を袋から取り出す

「今度はハズさないように・・・」

「ふん・・・もっふ！！！」

あ、へんな声でちゃった。

今度は・・・？

あ、食べた食べた。

コツチ来た・・・？

おおっ！！なんか窓がでてきた！

「パートナーの名前を付けてください」

そうか名前かぁ・・・

何にしようかなー

狼・・・ウルフ・・・パーフェクトマン・・・いやいやいや！
これはないな！ウーン・・・。

オオカミ？ザフィーラ・・・「ガルルルル・・・」

うわガルルル言ってるし・・・。

じゃあアルh・・・

「分かったから噛むのやめて。」ガジガジ

うん？ガルル・・・ガルル・・・ガルム？

「ガルムってカッコよくね？」

うwwwwはwwww
いいな！カックイイな！

よし！ピ・ポ・パ・と。
え？なんか違う？気にするな！

「ガルムを正式に貴方のパートナーと設定しました。」

「これからお前はガルムだ！よろしくな！！」

「あおん！」

というわけでパートナーが出来た。

結構頼れそうだ！

こいつに任せておいてオレは戦わな

「イヤ・・・俺もちゃんと戦うから・・・足放して・・・」
ガジガジ

にしても・・・疲れたな。

ほとんどヒッキーと化してたオレにはキツイなあ・・・。

もう目の前が暗くなってきてるし・・・w

「ちよっとコロンで・・・寝よ・・・くぁ。」

・
・
・
おやすみなさい。

そのまま俺は前のめりに倒れた。

…ガサツガサササツ

「本当にコツチから聞こえたのか？」

「うん、間違いない。」

side out・・・

「なにもあんなじじいと一緒にせんでも・・・なあ？」

「まあまあ。木之さんも本気でそう思った訳ではありませんから。」

V e r s i o n 2 - 餌付け大作戦！〜 T ・ H ・ 神様はおじいさんなのか？〜

作業用BGMは「おじいさんのグルメレース」と「W ・ O ・ キャン

デーは甘くてクリーミーなのか？最終鬼畜祖父ヴェルターズ・O」

魔王めっちゃ怖かった。

Version 3 - 神様のご利用は計画的に - (前書き)

この話も鬱章と同じくらい書くのキツかった。

え〜、見るの〜？

いや嬉し〜いけど。

それじゃ〜

ど〜ぞ〜。 (投げやりな感じ) ぞ

Side???. in???

「うーん、ふああ。」

両手の指を組んで上に伸ばし、毎日の狩りで溜まった疲れをとる。それと同時に欠伸が出てくるが、かみ殺す事などせずに大口を開けて息をはき出す。

周りはゆったりとした雰囲気でそよ風が吹き、青々と生い茂った草が風に引つ張られている。

昼寝するにはとてもいい天気なんだが……。

「ふふ、キリト君眠いの？」

笑いながら聞いてくるアスナ。

そう。アスナがいる。

せっかく彼女と一緒にピクニックに来たんだ。

ここで寝るのは失礼だ…というか勿体無い。

しかし……眠い。

「ああ。おいしいモノも食べて、天気もいいし、敵も出ないし。眠くもなる・・・ふぁ。」

アスナに話しかけられて返事をするが、話しているそばから欠伸が出てしまい、又もアスナに笑われる。

「そんなに眠いんだったら寝てていいよ？」

私が代わりに周りを見てるから。」

「いや・・・。女の子に警戒を任せて自分は寝るってのはさすがに・・・。」

男としてのプライド的なものかなぁー・・・。

「そんなこといいながら瞼が下がってきてるよ？」

いいから、ホラ寝た寝た。」

そんな事を言いながら俺を寝る体制に誘導するアスナ

うっん、まあ、アスナもこう言ってるしなあ。

へんなプライド張っても意味ないか。

「そう、か？　なら・・・。」

寝させてもらおうとしよう。

s i d e o u t . . .

s i d e アスナ i n ・フィールド

「そう、か？ なら……ぐうぐうぐうぐう。」「速っ！！」

「っ、それだけ疲れが溜まってたんだろーな……。」「眠っている彼、キリト君の顔を見ながらそう呟く。

彼はこの『悪夢』のゲーム、ソードアートオンラインの中でもか

なり名の知れたプレイヤーだ。

そしてその知名度に見合う・・・いやそれ以上の強さをもっている。

しかし、強いともなれば皆の注目も集まるが、皆の期待を一身に引き受ける事にもなる。

『アイツならこのゲームをクリアして、オレ達を解放してくれるんじゃないか。』

『あの人なら私たちを元の世界（現実）に戻してくれるんじゃないか。』

つまり、強ければ強いほど期待と責任感に押し潰されてしまう確率が増えてしまうという事だ。

実際、その重圧に押し潰された人を何人か知っている。

皆ほとんど眼に力が無くなっていき、最後にはフィールドを囲む柵の外に身をおどらせながら、こう言う。

『オレはノアタシはもう疲れたんだ。』

ステージから階段以外の方法で出ていく・・・つまり柵の外に行

き落ちる。

ソレはシステムの死を意味する。

みんなみんな、周囲からの期待に殺されてしまったといってもいいかも知れない。

そして、『血盟連合』《Knights of the Blood》の頭文字を取って

KOBとも呼ばれる中規模攻略ギルドに所属し、そこで副団長を張っている

自分も、いずれはそうなるのだろう、と薄々思っていた
自分でも死んでしまってもいい、とすら考えていた。

遅々として進まない攻略、モンスターとの辛い戦闘、仲間割れ・

それらを毎日のように繰り返しては、自宅で泥の様に眠る日々

そんな毎日に『生きる』という価値を見出せないでいた

しかし、彼と出会って自分は変わった

彼の第一印象は最悪だった。

正に今からボス攻略に赴こうとしている時に彼を見つけた。
彼は私たちが物々しい装備に身を包んでいるのに比べ、黒いレザ
ージャケットにジーンズを穿いて、まるで自分には関係ないとても
いうように、

広場で昼寝をしていたのだ。

彼の格好はかなりアレだが、とてもレベルが高く見える。

そんな彼を見て、何故だか私はとても悔しくなった。

そして思わず声をかけてしまっていた。

「ちよつと、アナタ！」

そして徐々に彼を知っていくにつれて、分かった事があった。

モンスターや、トラップ果ては同じプレイヤーから死の危険に侵さ
れる可能性があるこの世界……。

けれど、彼はそんな日々の中でも自分を見失わずに生きていた。

雨が降ったら本を読んで、

晴れていたなら日向で昼寝をして。

悲しいことがあったら泣いて、

楽しいことがあったのなら笑っている。

こんな世界の中でも、自分を見失わずに生きてられる。

私はそんなキリト君の事が妬ましくて、そしてそれ以上に羨ましくて……。そして、好きになっていた。

それからの行動は自分でも速かったと思う。

彼の事をKOBの友達にも手伝わせて調べたり、キリト君の居場所がわかったら、討伐系クエストだろうが採取系クエストだろうが即行で終わらせて、急いで身だしなみを整えて彼の居る場所にいったりした。

その甲斐あって、遂に彼と一緒になれた。
ま、まあそうなるまでいろんな事があつたんだけど…。

具体的にいったらキリト君が『二刀流』っていう、二つの剣を使えるスキルで、ボスを一人で倒しちゃったり、私のストーリーカーの人に殺されかけたり、
……き、キリト君が私の家に泊まったり／＼

ダ、ダメよアスナ！あの日の事を思い出してはダメー！！
あの時は恥ずかしかつたなあ……／＼
だ、だってキリト君あんな事いうんだもん……。

ハッ、いけないいけない。
思わず意識がトンでた……。

にしても、ホント……

「鈍^{ニラ}かったんだよなあー、キリト君……。」

。 今まで何回も気づくチャンスはあったとおもっただけどなー……

わ、私がキリト君のことを、その……好き……だってコトに

ここまで気づかなかったのは、ある意味才能だと思っ。

厄介な才能だなあ……

で、でもその才能がなかったら……ほ、他の人に盗られてた……

今ぐらいはゆっくりにしててもいいよね、神様？

ユウ……ユウ……

「カアアアミイイイサアアアマアアア!!!????」

「あおおおおお~~~~~~~~ん!!!????」

・
・
・

か、神様？

sideout……

恋する乙女の気持ちなんぞ分らんから、お得意の暗い話で埋めたつた。

イヤー、いい仕事したでホンマ!

だって恋どころか一目ぼれもしたことないもん。

だからかなり短くなりましたが、次回から地味に伸ばしていきますので、よろしくお願いします。

ではみなさん一緒にい!!

キ
リ
ト
モ
ゲ
ロ

Version 4 . . . コマドレッシングって、どんな野菜にも合うよね！ . . . (前)

自分は推敲なんてしない！てか出来ない！！

だから仮のハズで決めたサブタイトルもそのまんまだ！

後、毎度の事だけど関係無い話が混ざってる。

そこんとこ注意して〜、

ドウゾ？

Version 4 . . . マドレッシュンゲって、どんな野菜でも合うよね！ . . .

Side 裕士 in フィールド

「う、うん . . . ?」

なんだか良い匂いがする . . . ?
頭の下も柔らかいし

「あ！起きたかな？ ね、大丈夫？」

どうやらオレが起きたのに気付いたのが、声が掛けられる
女性特有の優しげな声音だ。

しかし、大丈夫かどうか？
フッ。

「 . . . ム . . . リ。」

オレは身体中の力を口に集中させ、答える

「ど、どうしたの!？」

HPバーは満タンだし、ステータス異常も付いてないよ!？」

酷く驚いた様な声で聞いてくる女性

しかし、違う！

ヒットポイントだとか異常だとか、
そんなややこしい話では無いんだ！！

「は……。」

「は……？」

「ハラ減った……ッ！」

空腹。

今の状態を表す言葉はコレに尽きる。

食欲：それは彼の三大欲求に存在しながら、同時に七つの大罪の一つとしても数えられる、人間と……いや、生きとし生けるモノ全てと切っても切り離せない関係にあるものだ。

生きる為には食べなければいけない。しかし、食も度を過ぎれば毒となる。

だが！ 強欲で傲慢で罪深き人間は、止まるべき場所を知っていても、だからどうしたとでも言うようにあっさりとその線を跳び超える。

あの気高き百獣の王でさえ引き際は心得ているというのに……！

ある女の話しをしよう。

その女はかつてこの世の全ての食を喰らい尽くした。

四角い大地のこの世の隅まで獲物を追い詰め、
大地の恵
み

深く海に潜りあの世の果てまで獲物を追い求め、
海の恩
恵

空の上の神の召し物さえ食べ尽くした。
空の慈悲

あらゆるモノを喰らいつくした女。
この世で食べていないものなど無い。
そう思っていた女の眼に、有るモノが留まる。

オカーサン、キョウノゴハンはナアニ？

カ

（そうだ。
まだ、

キョウハシチューニシマシヨウ

たつかないてべ食をンゲンニ
わ

しかし館の中に動くものは彼女独り。
仕方なく彼女自ら動こうとすると、再び眼に留まるあるモノ……。

イ ナ ヤ ジ ル ア ニ ロ コ ナ ン コ 、 ラ ア
ト

女はとても嬉しそうな顔で、ソレを口元に持って行った。

その日、屋敷から一切の音が消えた。

と、こんな風に食べ物には人を狂わせてしまうチカラがある。

しかし、人には必要不可欠なもので有るのも確かだ。

そしてオレの体には有るモノが決定的に欠けている。

そう食べ物だ！

しかし、オレは食べ物など持つておらず、せいぜいが〇エルター
ス……。

飴を数百個食べたところで、腹一杯にはなるまい。

だとしたらこの女性を頼るのが一番可能性が高いと思うが……。

「あ……ゴメン。」

お弁当持つてきてただけど……その……全部食べちゃって……
」

「Nooooooooooooo!!」

こっの食いしんぼがアアアアっ!!!?!

あ…もうダメ…腹が減って力が出な〜い

「あ、アイツの事は…任せたぞ。

オレアもう…駄目だ。」

「ちょっと待つて!?

アイツって誰!? 誰に伝えればいいの!?

お願い! 死なないで!」

「アア…あともう一つ伝えといてくれ…。」

「何? 何なの!?!」

「約束…守れなく「イヤアアアアアアアアア!?!? それフラグよね!? 絶対フラグよね!? 言わせるもんですか!?!」ドレス「だめええええええええええ!! ドレッシング!! ドレッシングがどうかしたの!? 飲みたいのね!? 分ったわ!」え、ちょま…あああああああ」

「まで! どうして!?! どうして『ドレス買ってやらなくてゴメンな』が『ドレッシング飲みたい』になるnオボロロロロロ…。」

力の限り口の中に押し込まれるドレッシング…。

ゴマ味が…フフ…こんな終わりも悪く…な…

ガクッ

「いやあああああああああああああ——————————」

イヤ・・・いやあつて・・・。

トドメ刺したのアンタで・・・・・・

「え〜つと・・・ナニしてんの？」

溢れるゴマドレッシングに埋もれていく意識の中、（今まで眼閉じてたんだ）最後に聞こえてきたのはそんな気の抜ける様な声でした・・・ゲフッ。

side out・・・

その言葉と共に、広げていたピクニックセットをそのままに、私達は走り出していた。

・ ・ ・

《迷いの森》・・・このアインクラッドで三十五層目の北部エリアに有る森で、碁盤状になっている数百のエリアから出来ていて、一つのエリアに入ってから一分立つと東西南北の隣接エリアの連結がランダムに入れ替わってしまうという、まさに迷いの森の名にふさわしい場所だ。

森の全体図を表している地図も売っているにはうっているが、生憎キリトとアスナは今持っており、当てずっぽうに進んでいた。

・ ・ ・

sideキリト・IN迷いの森

クソツ迂闊だった。幾ら迷いの森は随分前に突破したエリアだからといって、地図も持たずに飛び込むじゃなかった！

手がかりもなにも無いから探しにくいし、有ったとしてもエリア
が入れ替わった後じゃ意味が無い……。

どうすればいいんだ！

オレはもう、目の前に助けられる命が有るのに見捨てるなんてした
くないんだ！

「キリト君、焦っちゃダメ。

焦ってたら大事な事を見逃しちゃうよ？」

「ああ……。」

いくらアスナに諭されてもオレは焦るばかりだった……。

数分ほど歩いたところでアスナが歩みを止めた。

「静かにしてキリト君。今何か聞こえた気がするの。」

「ホントか？どっちだ」

「こっち。」

…ガサツガサツガサツ

「本当にコツチから聞こえたのか？」

「うん、間違いない。」

アスナの後ろを草木をかき分けついていくも、何も聞こえてこない。

・・・いや聞こえた。

そして音の聞こえる場所が見つかった

そこは丸く木が切られ小さな広場のようになっていた。
そしてその中心には・・・！！

〇 ?

腰

〇 ? 足

?

頭 腕

こんな感じで人が倒れてた。

ハッ！？

意識が飛んでいた！？

こ、この感じ……！！！！

ヒースクリフと戦った時にも……！？

（違います）

「と、取りあえず助けようか（？）、「キリト君」

「あ、ああ……。」

……ナニをどんな風に？」

二人して呆気にとられていると、奥の方の茂みが揺れて……モンスターが出てきた。

そのモンスターはオレ達に気付かず、奇妙なポーズで倒れている子の方に………
つて！

「アスナ！！その子をさっきの場所まで連れてけ！

俺はコイツを倒してから行く！」

「分った！早くきてね！」

ああ！

モンスターは突然現れたオレ達に驚いたのかしばし動きがとまっていたが、獲物を奪われると思ったのか、跳び掛かってきた。

すぐさま俺も自らの黒剣、エリユシデータを抜き放ち、モンスターの直線状に構える

しかし、モンスターはその身に合った身軽さで、体をひねり剣を避け、互いの場所が入れ替わる。

「さすが動物系モンスターだ、なッ！！」
言葉と共に斬りかかる。

右下から左上へと剣を流れる様に動かすが、今度はモンスターは跳びかかってこないで、後ろに跳び退く。

しかし追撃で片手直剣スキル、ヴォーパルストライクを発動、剣の先がモンスターに吸い込まれ、モンスターのHPカーソルを減らす・・・が、完全には削りきらずイエローゾーン半ばで止まった。

モンスターはHPを削られてもなおコチラを鋭い眼光で睨み見つけている。

(これは倒さないと諦めないっばいな・・・。
・・・本気で行くか)

大抵のモンスターは力の差を知ると逃げ出したりするのだが・・・。
たまにいるのだ、諦めないヤツが。

ただキリト自身、そういうモンスターはキライでは無いと思っ
ているが。

だからこそ普段は隠してあるもう一本の剣、ダークリパルサーも出

してトドメを刺そうと想ったのだろう。

「アオンツッ!!」

モンスターが一吠えした後、弾丸の様に突っ込んでくる。

「来いッ!!」

キリトも叫んだ後、狼に向かい、再びスキル、バーチカルスクエアを繰り出す。

二人が丁度広場の中心でぶつかり合う……。

あ……ありのまま 今 起こった事を話すぜ!

「俺は人を襲っていたモンスターを倒して元の場所に戻ってきたと思っただけだ。」

俺の妻が助けた人の口に力の限りゴマドレッシングを流し込んでいた」

な… 何を言っているのか わからねーと思うが

俺も (嫁が) 何をしたのか わからなかった…

頭がどうにかなりそうだった… 催眠術だとかマインドコントロールだとか

そんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ

もっと恐ろしいものの片鱗を 味わったぜ…

「えーっと、ナニしてんの…?」

その言葉を掛けるとギギギ…と擬音の付きそうな動きでこちらを見てくるアスナ。

「き、キリトくうううん!!!!」

うおっ! なんか泣きそうだ!!

「ど、どうしたんだ?」

その後なんとか聞きだすと、この子が死にそうだからゴマドレを口の中にブツこんだとのこと。

どういふことなの……。

「と、とりあえずウチに運ぼう。」

またモンスターが出たら厄介だしな。」

「う、うん……。」

ところでこの娘、なんであんなトコに？」

「さあ……まあ起きてから聞けばいいさ。」

顔を見ればまだ幼い感じの残る女の子《。。。》だ……。

髪はきれいな黒色でショートボブか。

目はちょっと吊り気味で、勝気な印象をイメージさせる。

この娘独りでこんなところなんて……心細かっただろうな

「さあ、帰るか！」

「うん！」

sideout……

ああ、「食」の話はキニスンナ。

それよりキノ君の容姿 . . . もうわかったよね?

わからないなら某ピンク髪のコピペで説明してやるう!

後、次回予告というものをやってみる。

キノ「おっす、木之太郎です。

ゴマドレッシング団の策略でアジトへと連れ去られたオレは、

危うく体液をゴマドレッシングに変えられそうになる

だがそのくらいで屈してたら、男塾には入れないからな!!

もっと、男を磨かないとな。

次回、『元オリ』、「実はタイトル決めてない」の巻

そこんとこ、よろしく!!」

感想くれたって . . . 、ええんやで?

Version 5 - チート・DE・フルボッコ - (前書き)

遅れてスイマセンでしたー！

宿題にガンガンやる気を削られてもうね・・・もう。

そんな事より今回チートが登場します。

まあ、設定がメチャクチャふわふわしてますがWWW

それと、オリ主でここまで気絶するのって、この小説が初だとおも
うよ。

そんじゃ張り切ってー！

どうぞー！

Side 祐士 IN・???

まだまだ脳が半分寝ている様な感じの中、どこからか聞こえてくる穏やかな音楽でオレは眼が醒めた。
授業で聞いたような優しい音色だ。

「う・・・ココは・・・？」

目を開けるとソコには・・・

「リアルに知らない天井です。ハイ。」

木で出来た美しい木目の天井があった。

オレの下には柔かなベッド・・・フカフカだ。

どうしてオレはこんなトコロに居るんだ？

ちよっと思いついてみよう。そうしよう。

えっつと・・・？

・
・
・

今狼から逃げる為に全力疾走している僕は予備校に通うごく普通の男の子。

強いて違つところをあげるとすれば、神様からソードアート・オンラインの世界にトリップさせてもらったってところかなー
名前は木之祐士。

・
・
・

うん。

なんか違つ気もするが、まあ合ってる。

・
・
・

そんな訳でSAOの世界の何処かの森にやって来たのだ。

ふと見ると森の中（というか眼の前）に一匹の若い狼が座っていた。

ウホッ！ いい獣・・・

ハッ

そう思っているとその狼は僕の眼の前で口から涎を出しはじめたのだ・・・！

あ おん

そういえばこの森はモンスターが出ることで有名なところだった
動物に弱い僕は襲われるのが怖くてホイホイ逃げちゃったのだ

（中略）

なんだかんだで狼が使い魔になった後、ぼくは寝て（気絶して）しまったんだ。

そして起きたら・・・近くに女の人が居た。

その人と話していたらなぜかゴマドレッシングを飲まされるとい
う意味不明な状態に陥っていた。

「無理無理無理無理無理無理無理無理無理。」

『男は度胸！なんでも試してみるのさ
きつとおいしいぜ』

『ほら。遠慮しないで飲んでみるよ』

「いいです！マジでいいですか「・・・アッー！」

そしてゴマドレッシングを飲んでいるうちに意識が薄れて・・・

「で、今ここに居る、と。」

まったく？がらないんだが・・・。

アレか？オレをゴマドレッシングで生き埋めにするためには起きていて貰わないと悲鳴がきけなくて楽しくないとかか？だからオレをわざわざアジトまで連れてきてここでゴマドレの刑に処すつもり

か。

フッフッフ、だが甘いぞ！オレはゴマドレッシングなんぞに屈したりはせん！

この空にさんと輝く太陽がある限り！

ガチャ

ム？どうやらゴマドレッシング団、略してゴマドレ団の団員が来たようだ。

ドアノブが回り、ドアが開いてあけた本人が徐々に見えてくる。

団員は女性構成員のようで、今起きたばかりなのか目を擦りながらコチラを見ていゝる……！？

「あ！よかった、起きたのね。」

(。°。)

(っ) () ヲシ ヲシ

(。°。)

(っ) () ヲシ ヲシ

(。°。)

・
・
・

どうみても原作ヒロインでキリト君の嫁アスナです。
本当に有難うございました。

という事はここは……？

「あ、ここ？」

ここはね私の家なんだけど……。

ちよっと待っててね。」

そういうとアスナは入ってきた扉から出て行った。

(いきなり原作組とエンカウントか。

コレはいいんだが……)

まさかオレの口の中にゴマドレッシングぶっこんだのって……？

そんな事をオレが考えていたらパタパタとスリッパの音

どうやらアスナが戻ってきた様だ。

部屋の中に入ってきた彼女の後ろを見れば……、

「ごめんごめん、待った？」

この人が君を助けてくれた人で、名前は……。」

こちらも寝起きなのか瞼を擦っていたが、振られると姿勢を正し
言った。

「キリトだ。」

イメージにある黒コートは身に付けておらず、それでもやはり黒い服を着た、

我等がヒーロー、ご存じキリト君が居た。

…黒色好きなのか？

「あ、それと私はアスナって言って、この人の奥さんです。」

…モゲロ。

「で、君は？名前はなんていうんだ？」

そう問いかけてくるキリト君。

「オレは…」

アレ、そっぴや神様名前何にしたんだろ？

「オレは？」

そっぴいなからコチラを見てきてる二人…。

ええい！名字でいいや！

「キノだ。」

「そうか。ところでキノ…ちゃん？「ちょい待って。」ん？」

「何故にちゃん付け？」

「だって…君性別は？」

「男だけど？」

「え？」

「え？」

「え？」

「何それ怖い」

八モるなその二人

「え？逆に何だと思ってたの？」

「何って・・・なあ？」

「なあって、振らないでよ。」

ええ〜つと・・・、女の子？」

何それ怖い

いや、結構女顔かもしれんが・・・。

「え？キリトも？」

お前もそう思ってたの？」

「だって・・・寝てるトコしか見てないんだぞ？君結構女顔だし、寝てると気が付かなかったんだ。」

今違うつて分ったけど。」

「自分も結構女顔のクセに？」

「うぐう・・・まあ何だ・・・その、すまん。」

はあ・・・ま、いいか。

「とじろで、」

「オレをゴマドレッシングで溺死させようと目論んだの、誰？」

うわぁ・・・アスナめっちゃ目え背けてる・・・。

「アスナだ。」

「ちよっ、キリト君!!?」

何の躊躇いも無く嫁を売ったな、キリト。

でもそれより……、

「ほぉお〜う?」

まさか「ごまかそうとしてたのかな?」かな?」
ゴマだけに。

「い、いや〜・・・。」

めっちゃ目泳いでますよ?アスナサン。

ユラ・・・リと立ち上がるオレ

さあ、どうしてくれようか・・・?

そうだ。

ゴマドレの刑だ

理想を抱いて(ゴマドレで)溺死しろ

「いっ、イヤアアアアアアアアアアアアアアアア」

〜ゴマドレの刑執行中〜

「ブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツ
やりすぎちゃった」

「バカかお前は」
そう言われてキリトに頭を叩かれる

「痛いじゃないかキリト君。
背が伸びなくなったらどうする!」
「ただでさえ」ちよつと身長が低いかな?』とおもっているのに!

「痛いじゃないかじゃないんだよ!
バカかお前は!

人の嫁に何してくれてるんだよ!」
「ダイジョ〜ブダイジョ〜ブ。
ちよつと崇拜する様になるだけだから……ゴマドレを。」

「ブツブツブツブツ……ゴマドレフヒヒ。」
「ほらね?」

「どこが大丈夫なんだ！」

「あ、イタイイタイよう・・・。」

ホントそのうち治るから！ね！

落ち着いて!?!」

「ホントだな!?!」

顔が怖いツス、アニキ。

「キノ、ウソツカナイ！」

・・・で、さっき何言おうとしてたの?」

「あ?ああ。」

お前が迷いの森で倒れてた時、モンスターがお前を襲おうとしてたんだ。

それでとりあえずお前を避難させてから俺が倒したんだが・・・。

」

そっいいながら人さし指と中指を立て、右手を振ってウィンドウを出すキリト。

いいなあ・・・オレもやりたいな。後でしよつと。

「コレをドロップ（落と）したんだ。」

キリトから物を受け取りながらそんな事を考えていた俺は、そのアイテムを見て思わず息が止まる・・・。

「このアイテム、《ガルの心》に聞き覚えがないか?」

「キリトよお、一回ブン殴らせる・・・。」

「やっぱりそうか・・・。」

「ブツブツブツブツブツゴマダ」・・・って、え!?

殴らせるってどういう意味!?!??

キリト君の『やっぱりそうか』も何が!??

「……モンスターは倒されるとたまにアイテムを落とすよな?」

オレが黙っていると、キリトがアスナに話し始める。

「え?ええ、装備とかも落とすわね。」

「でも、『たまに』じゃなくて、『絶対に』落とすヤツもいるんだ

よ……。」

ボスの他にも、イベントモンスターの他にもな。」

「え、それって…!??」

「このアイテム、『ガルムの心』はなオレの使い魔、ガルムが落と
したんだよ!!--!」

そう、ボスやイベント以外の、必ずアイテムを落とすモンスター・

・

それは 使い魔 だ。

使い魔が戦闘によって倒されたりすると、その場にそのモンス
ターを象徴するアイテムが残る。

ガルムの場合のはあの長く手触りの良い漆黒の体毛だったが、オレに
はそのアイテムの名を確認するまでもなく、それがガルムの毛だと
わかった。

「それじゃ、キリト君が倒したあのモンスターはキノ君を守ろうと

してたの……?」

「だから、一発ブン殴らせる。それでチャラだ。」

「……分った。外に行こう。」

「キリト君!？」

「いいんだ。オレが悪いから。」

そして外に来てキリトがウィンドウを出し、何か操作するとオレの前にメツセージが現れた。

「ごうしないとダメージが通らないからな。」

言ってくれるじゃないか!

後悔すんなよ?

「ちょっと! ホントにするの!？」

アスナがそう話しかけてくるが、オレ達は返事をしない

【キリト から1vs1デュエルを申し込まれました。 受諾しますか?】

もちろんYesを押す。

オプシヨンは《初撃決着モード》

本当に一発当たれば終わりだ

オレとキリトはジワジワと減っていく開始までのカウントダウンの間に言葉を交わす

「一発だからデカイのいくぞ。」

「ああ。来い！」

「言ったな？」

「そんじゃ思いつきり」

オレもキリトも素手だ。

そんな状態でデュエルなんて、普通はしないんだろうが……、

「いかせて貰うぜ？」

生憎、オレは普通じゃない

【DUEL!!】

】

問、答、無、用！

オレはキリトに肉薄すると、素早くキリトの体を掴む。
そして、熱い心を解き放つ！

「ヒイヒイイト・エンドオツ！！！」

チユドオオオオオ・・・ン

辺りにそんな音が広がった。

それと同時に、凄まじい光と熱が放出される。

「あ、あははははは・・・。

アレ？

キリト君はどこ？」

爆風で髪を乱されながらもアスナは当たりを見渡すが、キリトの姿は見えない。

さあ？ドコまで吹っ飛んだんだろね？

まさか今のでバラバラに・・・？

・・・。

「・・・嫌な、事件だったん「勝手に殺すな！」ああ、居たんだ。」

家の周りに生えている林の中からよろよろと出てくるキリト
その姿はボロボロで、雑巾のようだ。ざまあw

キリトは某台所の黒い悪魔を連想させる速さでこちらに寄ってくると、オレの両肩をがしりと掴み、
万力の様に締め付けてきた。

「オイ！」

「今のはなんだ！」

「何だつて……、爆熱ゴッドフィンガーだけど？」

「技名言つたじゃん。」

「なんで！」

「そんなの！」

「出来るんだよ……！」

あああああ……肩持つて前後に揺すらないでえええええ
は、吐く！吐くからあああああ！

・
・
・

キリトの家の中に戻ってきたオレは、二人から尋問を受けていた。

……決してナニかが入ったびんを見せられ脅されたワケじゃない。

「「ユニークスキルう！？」」

「あの、スツゴイ爆発したヤツが！？」

「うん。正確にはちよびつと違うが。」

そう。読者の皆さんはもうわかりだと思つがこれがオレの貰つた一つ目のチート、

『ありとあらゆる打撃技を使える程度の能力』だ！
東方風なのに意味は無い。うん。

そして内容だが、『オレの知っている素手で行う技が使える』と
いう、かなりのチートである。

この『素手で行う技』っていうのは武器を使った技は再現出来ない
…例えばワンピースのゾロなら、三刀流の龍巻きは出来ないけど、
無刀流の龍巻きは出来るってことだ。
三刀流は武器を使っているのでアウト。

『やり方』さえ分っていれば発動できるので、現実の技はモチロ
ン、二次の技まで使いちゃうのだ。

あまりにも攻撃力が高い奥義なんかは要練習らしいけど、ぶつち
やけ下位の技でもドンドン倒せると思う。

これさえあれば『さあ、キミも今日からクンフーマスターだ！』と
かできる。

だが本当の事はキリト達には言えないので、【バトルマスター】
というスキルで、いつのまにか出ていて使えるようになっていたの
で詳しい事は知らない、とっておいた。モチロン口止め付きで。

「近接格闘専用ユニークスキルねえ……。」

それって、かなり危険じゃない？

ほら、さっきみたいに相手が丸腰ならいいけど、相手が武器を装
備してたらいくらあんな高火力の攻撃でもリーチ差でやられちゃ
うわよね？」

うん、もつともだ……。

……どうしょ？

「そこらへんは、キノに手甲を装備させればいいんじゃないか？
手も守れるし、攻撃力も上がるかもしれないし。」

「いい鍛冶屋知ってるから、いつか紹介してやるよ」

「・・・キリト。」

「なんだ？」

「はつきり言っただけ見直した！」

「だろ？」

「（見直したってことは、今まで見損なわれてたって事じゃ・・・？

・・・黙っておこう。）」

「って！そんな事より！！」

「ガラムを生き返らせなきゃ！！！」

「あ」

「あ」

「あああ！？待て『あ』ってなんだその今思い出しました的なのは
！！！」

「いやだって・・・キノ君のスキルが衝撃的すぎて・・・。」

「アスナと同じく・・・。」

「もういい！」

「えっと・・・生き返らせる事が出来るのは三日間だけだから・・・

よかった。まだまだ余裕じゃん。」

「あゝ、っとその事なんだけど・・・。」

「ん？なんだアスナ。そんな言いにくそうな顔して。」

「私達がキノ君見つけたのって・・・昨日・・・なんだよね。」

「・・・ナンデスト？」

「じゃあ後、二日……?」

「うん。」

「ああ。」

「……行ってくる。」

「ちよつと待つて! 私達も行かせて!」
え?

「キノ君、《思い出の丘》の場所知ってるの?」

あ、そういえば……。

「それにガルムが死んじゃったのも、私達のせいだし……。
だから一緒に行きましょ? ね?」

「えつと、いいの?」

「うん。キリト君もいいよね?」

「もちろん!」

それじゃあ……

「よ、よろしく。」

「よ、よろしく。」

こうして【ガルム生き返らせ隊】が結成し、一緒に行く事になった。

目指すは四十七層、《思い出の丘》……!

・

「ところで、何であんなところで下着姿で倒れてたの？」

「え？（ダラダラダラ）」

キノ君の元ネタは時雨沢恵一先生のライトノベル「キノの旅」から来てるよ！

作者は時雨沢先生が大好きなんだ！

先生の書いた話の中に、自分と同じ誕生日の人が二人も出てきた時は、発狂しかけたよ。

ちなみにキノ君の容視は原作キノが男化して、更にちょっと目が吊り気味って感じ。後、寝ぐせが付いてて後頭部の髪がピョンピョン跳ねてるみたいなの？

それと、一番大事なのは、

『男の娘じゃない』ってトコだよ！

前回みたいに、『いつもの性格が表に出て無い』、つまり、寝てたり、演技(女装・・・?)してなかったら女の子と間違われる可能性は絶望的に低いよ。ザンネンだったな！

よーするに、

起きてる時⇨ちょっと可愛い男の子
で、

寝てる時or演技してる時⇨ボーイッシュな女の子 だよ！
メンドイけどよく覚えといてね？

にしてももうすぐ夏休みが明けるね……。

これからドンドン更新が遅れるかも……(汗

Version 6 - 問題解決・・・? - (前書き)

キノー！俺だ！！結婚してくれ！！！！

…ハッ！？

まさか…。今の見てた？

これ上げるから言わないで？

どうぞ。

(一切のストーリー展開がありません。ハッテンもありません。)

「……。」
「……。」
「……。」

沈黙が場の空気を支配する

そこで一番に声をあげたのはアスナだった。

「そついえば朝ご飯、食べてなかったね。」

「ああ。キノを拾って来た事で色々バタバタしてたしな。」
キリトも続く

「……ご飯、食べる？」

「食う！！」

オレはキリトと競う様に家に入っていた。

・
・
・

「うまい！！」

「そう？フフ嬉しいわね。」

と料理しながら言うアスナ。

オレは今アスナの料理を食べている。

そう！原作でも有名なアスナの料理だ。

さっきまでアスナとキリトも一緒に食べていたのだが、あまりのウマさにオレの箸が止まらず、アスナにお代わりを要請、そしてアスナが作る、オレが食べるを繰り返しているのだ。

既に更は山のように積み重ねられているが、まだまだ足りん！！

キリトも二、三回お代わりをしていたが、オレにはついてこれなかったようだ

(ふふふ、うらやましかろう…? 食べたいか? 食べたいのか?
だが断る! 少しもやらん!)

と、一人で誰に言うとも無く、アスナ特製フルコースを消化して
いく。

「ああ…、数日分の食糧がドンドン消えていく……。

お前は俺を(家計的な意味で)潰す気か!？」

なんか斜めからそんな情けない声が聞こえてくるが、そこは気にし
てはいけない。

いけないいたら、いけない。

「クソ、こうなったら俺ももっと食っててやる!」

おお、それでこそ男だよキリト君!

小さい事でクヨクヨするくらいなら、開き直っちゃまえ!

「アスナ!俺にもくれ」

「ハイハイ、ちょっと待ってね!。」

と、アスナがキリトの前にも料理を置く。

そして、いざキリトが料理を食べようとした時、ピピピピ…と音
が鳴った。

「あ、メールだ。」

なるほど、今がメールの音なのか。

キリトは指を振ってウィンドウを開くと、メールを見るボタンが
あると思われる場所をクリックした。

そして多分メールを読んでいるのだろう、顔がだんだんと思案顔に

なっっていった。

メールを閉じると今度はキリトが手を動かし、メールを打ち始めた

(……なにがメールに書かれていたんだ?)

とそう思いながら皿に手を伸ばす。

…ウマウマ。

キリトがメールを終えてウィンドウを閉じて自分の皿に手を伸ばす……が、そこに皿は無く、

キリトの手は何も無い場所を突く。

「おまえ人のものを！」

「仕方ないね。」

「ホラ二人共？まだご飯はあるからケンカしないの。」

「ハイ。」

「ふう……、喰った喰った！ごちそうさまでした！」

「はい、お粗末様でした。フフ。」

「結局一週間分も喰いやがった……。」

だってウマイんだもの。

特にあのチャーハン！

危うくホイホイされるトコだったぜ。いやされたけど。

「それじゃさっそく、思いだ「ちょっと待った！」どうした？キリト。」

おやつは五百円までだぞ？

「誰が遠足前の小学生だよ。」

キノ、お前、そんなカツコで行くつもりなのか？」

「あ……。そ、ソレはアレだ！装備すんの忘れてたんだよ。」

「そうか……。」

ところで、今から行く【思い出の丘】は四十七層に有る。」

「いや、それは知ってるケド……。」

「だから、もしかしたらお前が今持つてる装備じゃレベルが足りないかもしれない。」

「いや、そんな事n」なので！予定を変更して先に鍛冶屋に行こうと思う。「……え？」

「目指すは四十八層、リズベット武具店 だ！！」

マジですかい……。

そして再び家の外。

今度こそは出発D「ああ、後、コレを装備しろ。」

そう言われて渡されたのは、上下の黒のジャケットに、キリト君がいつも着ているモノとは違う茶色のコート。

……そんなにオレの台詞を切るのが好きかね？キリト君や。

まあ、着るけどさ……。

「……こつち見ないでよ、エッチ。」

「んなつ！？」

……やっぱりかえs「あああ嘘ですごめんなさい！！」まったく……。

「
そういつつも後ろを向いてくれるキリトとアスナ

(さて……。

どうやって着よう……?)

そう。

何も人前で着るのが恥ずかしかったワケではない。

そんな事が許されるのは美少女の特権だ！

男がやっても、キモチワルイだけだが、今回は恥を忍んで言わせて貰った。許せ！！

(読者の皆さんは既にご存じの事と思いますが、キノ君の容視はまんま『キノ』です。悪しからず。)

とと、話がずれたな。

まあ、何が言いたいかというと、出ないのだ。ウィンドウが。

さつきもキリト達の目を盗んでやっていたのだが、結局腕を千切れんばかりに振ってもウィンドウは出ず、

頭の中で『。。。』(〇ミ。おつくせんまん!)。。。 (〇ミ。おつくせんまん!)『やら、』(。。。) (〇ミ。えーりん!えーりん!』やらが空しく流れるだけだった……。

SAOの世界では普通、何かを装備する時は、

?まずウィンドウを開き、

?装備したいものをアイテム欄の中に入れ、

?それをドラッグして装備フィギュアの上に持ってくる

という手順を取る。

しかし、ウィンドウが出ないと、装備フィギュアの上のドラッグさせるどころか、アイテム欄にすら入れられない。

つまり、装備出来ない。

オレ＼(^o^)/オワタ

side out・・・

sideキリト

全く、何が「……こっち見ないでよ、エッチ。」だ。
しかし妙に似合ってたな。やっぱり女顔だからか？

……。

思わず納得しかけていたら、アスナに小声で話しかけられた。

(ねえ、キリト君。)

思わずコチラも小声で返してしまっ。

(何だ?)

(どうして急にリズムのトコに行くようにしたりしたの?)

それに、さつき渡した装備だって、わざわざアイテムボックスから取り出したりして…。)

ああ……。

(さつき俺がメールしてただろ?)

(ああ、あのキノ君にご飯を取られた時?)

(……、そうだ。

その時のメールは、PK狩りしてるアイツからで、『最近、犯罪ギルドがプレイヤーから装備品なんかを奪い取ってるから、気を付けとけ。』って内容だったんだよ。

だからキノはもしかしたらその被害に有ったんじゃないか?って思ったんだ。)

(ああ! そういえばご飯食べる前も装備してなかったもんね!

なんで装備してないかと思ったら、する装備が無かったのね…。)

(だからリスの所で装備を買って行こうと思ったんだ。渡したヤツはそれまでのつなぎだよ。)

へへ、そうだったんだ、と一人頷いているアスナを横目に、考える。

(だとしたら、ギルドにでも連絡を入れておくか…。

『軍』辺りが討伐に乗り出すだろう。

…しかし、キノのみたいなユニークスキルを持っているヤツが、そう簡単にやられるか……?)

……一応注意する様にも言っておこう…。)

PKへの対応を考えている時にキノの『終わったよ』、という声が聞こえ、振りかえり…

そして固まった。

シワ一つ無いピシリとしたズボン。

襟が左前になつてゐる腰よりも少し長いジャケット。

そのジャケットの上から腰の辺りで革製のベルトで止めていて、更にベルトには、実際には物を入れる事の無いポーチが三つほどぶら下がつてゐるのが見える。

その上には若干大き目の茶色のコートを羽織り、だらしなく前を開けている。

さつきまで下着姿だった時とは全く違う、旅人のような格好をしたキノが立っていた。

「な、なんだよう。なんか言えよう!」

「似合う……。」

思わず、アスナと被ってしまった。

しかし、それ位似合っていたのだ。

「キリト君センスいいね。」

「いや、俺はただ上から選んだだけで……。」

そんな正直な二人の感想に対してキノは、恥ずかしがっているのか、若干頬が染まっていて、それはまるで……。

「……女の子みたい（だな／だね）。」「

そう。

紛れもない少女に見えた。

キノは二人の言葉に頬を一瞬で更に紅潮させ、そして何を思ったか、拳を握りしめた

「オレのこの手が真っく……ストップ！ストップストップ！！？」

「……ちつ。」

「だって、今のはどうみても女の子だったよ！？」

「ああ、オレも思った！」

輝き出していた拳をまた開く前に二人に羽交い締めになれ、残念そうな顔をしながらも技の発動を止めた事に二人は安心した……。

（しかし、

似合うなあ
(

s i d e o u t . . .

s i d e 再びキノ

キリト達が有らぬ想像を膨らませている時、キノは -

(諦めんなよ…。諦めんなよ、オレ!!)

どうしてそこでやめるんだ!?そこで!!

もう少し頑張ってみてみるよ! ダメダメダメダメ諦めたら!

周りのこと思えよ! 応援してる人たちのこと思ってみろって!!

あともうちよっとのところなんだから。

もっと熱くなれよ……。

熱い血燃やしてけよ……。

人間熱くなったときがホントの自分に出会えるんだ！

だからこそ、もっと！熱くなれよおおおおおおお！……！
(

-
熱くなっていた。

(どうすりゃいいんだ!?)

ウインドウは開けないし……。

このまま着れたら……。

……ん?)

……。。。

ハッ！

…我、天啓を得たりいいいいいい！！！！

出来た！

「終わったよ。」

オレの声を聞き、二人がほぼ同時に振りかえる……。

side out……。

V e r s i o n 6 - 問題解決・・・？ - (後書き)

しかしキノ君の服の描写がしょぼ過ぎるWWW
・・・はあ。

Version 7 - おいでやす、浮遊城 - (前書き)

特に何も無かったので、タイトルが決められなかった。

ネーミングセンスが欲しい。

エターナルフォースブリザード！

アルティメット・インヴィジブル・どうぞ！！

・・・やっべ、カッコ良くね？

「アアン!？」

さっき何も無いって言ったばっかじゃねえか!

「いや……」

「方向逆なんだけど……」

「……」

「……」

「……」

何も言わずに、キリト達の居る場所へ戻る。

モチロン、顔は下に固定して、だ。

元の場所に戻り、言った。

「それでも参ろう!

者ども、付いて来い!!」

「無かった事にした!!?」

アスナ、君は何をいつているんだい?

「いや、だから今の事を無かった事に……」

訳が分からないよ。

「ええ！？ ……何、キリト君？」

アスナの肩に手を置いたキリトが首を左右に振っている……。

どうしたんだろね？
僕にはわかんないや。

「さあ、四十八層へ全・速・前・進・D A！」

「もう……いいや。」

「ひよころで……ゴクン、アレは何？もぐもぐ」

「あゝ、アレは……何だ、アレ？」

「ちよつと買って来る！」

「あ、おい。キノ！」

はいはい、オレだよ！

ただいま二十二層の主街区に来ています。

キリトン家から少し歩いたトコに有るんだけど、あんまり人が居なくって、正直つまらん。

まあ、キリトとアスナが隠れ家を選んだトコなんだから、人がいっぱいいても駄目なんだろうけど。

そんな訳で主街区の大きな一本道をゲート広場に向かって歩いていきます。

そのついでに道にある出店で色んなものをこんな風に買い食いしている。ウマウマ。

「つたく……。」

まるで仔犬が主人に向かって走っていく様に出店に近づいていくキノを見て、ため息を吐く。
後ろ姿に犬のシッポが見える様だ。

「フフ、キノ君って子供みたいだね。」

「いや、子供みたいって言うか、まんま子供だろう。アレは。」

目当てのモノを買えたのか、満面の笑みでコチラに駆け寄ってくるキノを見ながら、言う。

……あ、コケた。

ああ、紙袋の中の食べ物？が道に！

なんだ！なんで道に落ちた物体をそんなに見つめているんだ！？

落ちたモノを拾って？

手で叩いて？

顔を綻ばせて？

「セーフー！」

「じゃない！！アウトだ！口に入れようとするんじゃない！」

慌ててキノに近寄っててに持っていた食べ物を奪い取る。

キノが手を伸ばしてくるが、その前に地面に落ちたソレを向こうに放り投げる。

再び地面と接触したソレは、今度は残らずに、オブジェクトが崩れる様に消滅した。

「あ…、ああ…。」

ソレが消えるまで眺めていたキノは、急にコチラを向いて言った。

「勿体無いじゃないか！」

「仕方ないだろ！地面に落ちたモノまで食べようとするんじゃない！」

「三秒ルールだ！まだ三秒経って無かったモンね！」

「ウソ吐け！落ちた時この世の終わりみたいな顔してたじゃないか！その時経ってた！」

「経って無い！」

「いや、経った！」

「まあまあキリト君落ち着いて。キノ君も止めないと、紙袋の中に残ってるコレ、全部食べちゃうよ？」

「すいませんしたー！」

オレに突っかかっていたのを止めて、アスナに向かって跳躍、そのままキレイな土下座のモーションに移るキノ…。

これがジャンピング土下座…！！！！

……なんだかなあ。

「まあ、アレだよ。オレも悪いとは思ってるよ。モグモグ」

「喰いながら言っなよ。」

「元々はキリトの金で買ったもんだしな。モグモグ」

「だから喰いながら言っなよ。」

そうなのである。

実はウィンドウを開けないので、所持金の確認が出来ないため、見るだけで我慢していたオレ。

そんなオレを見かねたキリトがお小遣いをくれたのだ。

まあ、そのお小遣いも、今は半分を切っているがな！

あ、ちなみに今はさっきのを3人で食ってます。

商品名は「二十二層名物、モンスター焼き」キミはレアモンを引き当てる事が出来るか？」だ。

いわゆる人形焼きと呼ばれる奴で、アインクラッドのモンスターを模っているらしい。

そしてさっきから三人で『レアモン』を探しているのだが、見つからない。

そしてついに最後の一個で、出た。レアモンが。

「あ、コレじゃない？レアモンって。」
そういつてアスナが差し出したのは、全体的に丸っこく、手足は短いのに、身体の半分はあるうかという非常に長い耳を持つモンスター姿だった。

「これって……ラゲー・ラビツト？」

「だな。」

「ちよつと食べてみてよ。」

「うん。」

パクツ！ そんな擬音が聞こえてきそうな感じで、ラゲーラビツト焼きを食べるアスナ

「おいしい。」

そう言ったアスナの顔はとても緩んでいて、それはそれは見ているコツチが幸せになる様な顔だった。

「「すいまっせくん、モンスター焼きもう一個！」」

「え、二人共速っ!？」

「「うま~~~~~……!!」」

皆もアインクラッドに来る機会が有ったら、一度食べてみるといいよー!

まあ、ラグー・ラビット焼きを当てれるかは知らないけど

そんなこんなで、

「やって来ましたゲート広場ああ!!」
む、流石にココは人がいる様で皆からの注目を集めてしまった。

『なんだなんだ、お上りさんか?』

『素人じゃねえの?』

『アレって「キノ」のコスプレ?』

『キノたんテラ萌えす。フヒヒWWW』

「二人とも!今すぐココを離れよう!」
「ここヤダ!なんかキモチ悪い!

オレの気迫に押されてか、二人ともすぐに行動してくれた。

「いいか？」

街の名前は リンダース だからな。

「はいはい。……発音悪かったら、夜の闇横丁ノクタインなんかに出たりはしないよな？」

「何処？それ。」

「いや、いや」

最近の若いモンはハリー・オッターも知らんのか。

「じゃあ、オレから行くよ」

「うん、分かった。」

「じゃあオレ次ね！」

キリトが転移門の前に進み出る。

ゲートの内部の空間は雇気楼の様に揺らめいている。

キリトは右手をゲートに向け、言った。

「転移！ リンダース！」

瞬間、辺りに青い光が広がる。

それほど強くない光の中に、キリトが進んで行くのが見えた。

光はすぐに収まり、思わずキリトを探すが勿論キリトは居らず、転移門も先程の雇気楼の様な状態に戻っていた。

（今のが転移のエフェクトか……。想像してたのよりもちよっとキレイだったな。）

「さあ！ 次はキノ君の番だよ。」

「うわ！、つとと」

アスナに背を押され、よろけながらも門の前に進み出る。後ろを見ると、笑いながら手を振るアスナ……、

と徐所々にじり寄ってきている人達。

ゲート広場に居る、四十人ほどの人達がコッチに集まってきた。る。

アレ？

ま、まさかアスナを狙ってるのか！？と思い睨みつけるが、相手は怯んだ様子も見せず、ただコッチを見つめ返している。

「アスナ！逃げ」『うおおおおお、キノたくん！！！！』……
へ？」

え？なんでアイツ等オレの名前知ってるの？
てか『たん』ってナニ？焼き肉？タン？

周りを見渡すと、心無しか全員コチラを見ている様に思う。
しかも若干目が血走っている様にも視える。

……あはは、バカだなあ。オレは。

いくらナーヴギアでも、そんなトコロまでは再現しないだろう。

しかし確実に、着実に間を詰めてきている彼らの表情には、一切

の迷い（？）が無く、ただ一点だけを見つめている……。
そう、コチヲを！

それにまるで軍隊かのような揃った動き……。！
ほぼ全員同時にコチヲに踏み出している。

ジリ、ズサツ、ジリジリ、ズサズサツ、ジリジリジリ、ズサズサズサ

間違いない。

アイツらオレが一步後ずさることに一步踏み出している。

ハッ！

ならばコチヲが一步踏み出せば、奴らは後ずさるのでは！？
よし、試してみよう……。！

ズサツ。

ズサズサズサズサズサズサアツ！！

やっぱムリイ！！！！

あいつら来るんだもん！

オレが一步踏み出したら、アイツらもかなり進んで来るんだもん！！

違うよ？

オレからもキミ達に近づきたいとか、絶対違うよ？

……逃げよう！

「アスナ！ 逃げるぞ！！！」

「え、ええ？う、うん！」

オレはアスナに手を伸ばす。

アスナは急な展開に驚いている様だったが、すぐに手を握ってくれた。

転移門を振りかえり、右手を伸ばし、突撃しながら、叫ぶ。

「転移！！《リンダース》！！！」

そして、オレとアスナは青い光の中に飛び込んで行った。

あの人達マジ怖い……。

side out……。

Version7 - おいでやす、浮遊城 - (後書き)

作者は何回買っても全てドリンクエイプ焼きだったので、ラゲールビット焼きのウマさを伝える事は出来ない。

しかし出ないなあ、グラブ君・・・。
忘れないであげてね！

V e r s i o n 8 - 短気は損気。何事もドツシリと構えて、真実を見極めま

え、何？今回もサブタイの訳ワカメさがハンパ無いつて？
知らないよそんなの。

どしどし。

Version 8 - 短気は損気。何事もドツシリと構えて、真実を見極めま

Sideキリト IN・四十八層、ゲート広場

「遅いな・・・。

何か有ったのか？」

高さ5メートルはあるだろう転移門の手前で、一人呟く。

さっきまでに何度かゲートは光っているが、出てくるのは見知らぬプレイヤーだけで、自分の妻と友人？は出てこない。

二十二層向こうで何か起きたのかと考えるが、街中はアンチクリミナルコードが有るし、ボックスなどの行動妨害をされてもあの層のプレイヤー相手だったら、二人は楽に逃げきれんだろう。

176

そう考えている時に、ゲート中の層気楼が歪んだ。

誰かが転移してくる時の予兆だ。

(次こそはアスナ達か?)

そう思い、出迎える為にもゲートの正面に行く。

それが、いけなかった。

ゲートの中から、人の輪郭が後ろから光で照らされる形で浮かび上がった。

逆光なので顔は見えないが、シルエットからしてキノだろう。

「やっと来たか。　キノ、つふう・・・!!!？」

唐突に感じる、腹部への衝撃。

それは、街中だというのに何故かモンスターの攻撃と比べても遜色の無い威力だった・・・。

予想もしなかったダメージに一瞬、動きが止まる。

(な…なんだ？)

何が起きたんだ!!?)

衝撃の走った腹部を見ると、そこに居たのは案の定キノだった。キノの両腕は、俺の身体の後ろに回っていて、俺に鯖折りを掛けている。

うん、嘘だ。スマン。

ええっと、……抱きつかれている状態だ……。

何故か俯いていて肩が小刻みに震えており、頭はお世辞にも身長が高いとは言えないオレの胸板に押し付けられている。キレイな黒髪だ。

(これは…泣いている?)

以前にも同じような光景を目にした事のある俺は、その経験から
そう判断する。

(PKに遭った時の事でも思い出したのか…?)

なるべくキノを刺激しない様、極めて優しい声を掛ける。優しげ
な表情を浮かべるのも忘れない。

「おい。キノ…?」

俺の掛けた声に反応したのか、うつむいたままの頭頂部がピクリ
と揺れる。

そして、その頭がゆっくりと上がっていく…。

完全に取りきり、俺がキノの表情を視認できる位置になった。

キノは、濡れて黒く光る瞳でコチラを見上げていた…。

(やっぱり…。)

「…さあ、もう大丈夫…。」

先の言葉に繋げて掛けようとしたオレの言葉は、キノの行動によ
ってキャンセルされる事となった。

オレの言葉を止める原因となったのは、近付いてくるキノの顔。

何千、何万といういくつものポリゴンで構成されたその顔は、高性能なカーディナルにより再現されているので多分、現実と・・・それこそ全くと言っていい変わらないだろう。

（という事は、現実世界でもキノはこんな美少女みたいな顔してるのか・・・。

って、コレ言ったらコイツ絶対怒るだろうなあ……。）

そんなマヌケな事を考えている間も止まらなかった、キノの顔が・
・
・
・
・
・

オレの顔と、重なった。

S i d e O u t . . .

S i d e キノ

背後の連中から逃れる為、叫びながら転移門に突っ込んだ……。内側が揺らいでいる門の中に入った瞬間、目の前が蒼いヒカリでいっぱいになり、何も見えなくなる。

その後一瞬、妙な浮遊感が身体を襲うが、すぐ消えた。それとともに眼前を被うヒカリも段々消えていく……。

オレは知らない街に居た。

……まあ、街なんて二十二層しか知らないから、当然と言えば当然
なんだけどね？

見ているだけで心躍るような、カラフルなレンガ造りの道。

道の両端には水路が通っており、流れる水の音は涼しげな印象を与えてくれる。家々の壁もレンガで出来ていて、こちらは見る人の心を暖かくしてくれる様な赤錆色だ。

そしてゲートから出て真つ先に眼に飛びこんでくる白く大きな建物……教会は、周囲とは全く違う、厳しさと優しさを併せ持っているような印象だった。

そして何より……、

その教会の真ん前に立つてこちらを見ているキリトを見つけた瞬間、身体が自然に動いていた……。

トラトラトラ、ワレ奇襲二成功セリ。

レフトアームに付いていた速度制御部品をパージ、アメフトのタックルを思い起こさせる動きで突進、頭から標的に着弾を確認。

身体両側からアームを伸ばし、目標をロック。その後、すでに精製されていた液体で標的を守る黒き外壁への侵略を開始した。

(訳：

アスナの手を握っていた左手を離し、ものすんごい勢いでキリトに突っ込んだ後、両腕をキリトの背にまわして張り付く。

先ほどから涙がちよちよ切れていた目からは、限界許容量を超えたダムから溢れる大水の如く涙が流れて、キリトの黒いレーザージャケットを濡らし始めていた。

さっきのヤツら怖い。)

「おい。キノ…?」

標的がコチラを認識するが、未だ混乱に陥っているのか防御姿勢は執られていない。

奇襲などという何とも卑怯な手を使ってしまったので、せめて今からでも自らの意を示すべきだろう。

腐りながらもわずかに残っていた武士道精神でそう思い、伝えようと顔を上に上げる。

(訳:

いきなり突っ込んできて、キリトは驚いただろう。せめて説明をしなくては。

先刻の出来事によって削られながらも、僅かに残っていたSAN値でそう思う。

さっきのヤツら怖い。)

しかし、そこに待っていたのは、困惑した表情でも、怒りに我を忘れた鬼のような形相でも無く、まるで『うまくいった』とでも言うような感情をコチラに伝えてくる、そんな表情であった。

(・・・ッ! ハメられた!!?)

すぐさま聞こえてくる、後方からの雄叫び。この声は先んじて撒いて来た敵対勢力であろう。

恐らく、この標的はおとりなのだ。我をこの標的に引きつけさせておき、そこを背後から討つ。敵ながら天晴あっぱれな作戦である。

現に、コチラが奇襲を掛け、動きを封じたと思わされていた標的から伸びてくる両の手。

コチラの動きを止める為であろう。

しかし！仮にも我とて日本男児。

ここで大人しく捕まると思えば大間違いだ。

すでに身体の周りの八割ほどを覆われていたが、頭を後方に反らせ、勢いよく戻す。所謂、【経ヘッドバットツ怒罵ツ屠】と呼ばれるものを、敵の顔面に繰り出す。

ダメージは与えられなかったものの、怯ませる事は出来た様で、両腕の力が抜けた瞬間を狙い、身体を揺すり拘束から逃げ出す。一秒一瞬とて無駄には出来ない。

キリト／敵の横を通り、教会の横の道走り追ってから逃げ出した。
。。。

side out・・・

side アスナ in・四十八層、ゲート脇

見慣れた転移の蒼い光が収まり、ようやく周りが見渡せる様になった時、不意に私の右手を握っていたキノ君の左手が離されたと思っただら、広場に向かって猛烈な勢いで走っていったキノ君。そしてその直線状にいる……キノト君？

そのまま二人の距離はドンドン近づいて行って……？

「くぁwせdrftgyふじこlp;@:。」

キノ君がキリト君に抱きついた！？

それにキリト君も満更でも無いって顔して、キノ君を抱きしめようとしてるし！？

(・・・キリト君とキノ君には後でO H A N A S H Iを聞かせて貰おうかな？かな？)

なーんて。

キノ君、《あの人達》がよっぽど怖かったのかしら？
でも、ちょこつと羨ましいわね……。)

その時、再び蒼い光が辺りに拡がった。
どうやら、また誰かが転移してきたようだ。

『お、おおう？ここドコだ？』

『バカヤロウ、《リンダース》に決まってるだろうが。』

『そんな事よりキノたんはどこだお？』

『あそこに居るでござるwwwフオカヌポwww』

転移ゲートを振りかえって見ると、先ほど二十二層のゲート広場
で見た《あの人達》こと、例のプレイヤーがそこに居た。
・・・なんで？

『うおおおおおッ、キノたーん！！！！』

その声が聞こえたのか、キノ君の身体がピクリ、と動き・・・
次の瞬間、キリト君に頭突きをお見舞いしてた。

それも、一度頭を引いて、それを思い切りキリト君の顔面に叩きつ
けてた。

(うわぁ・・・イタそ〜……。あ、でもダメージはないのか。)

それでも急な動きには驚いた様で、拘束が緩んだキリト君の腕から抜け出して、教会の右側の道を走っていった。

『あ、逃げたぞ！追えー!!』

『ええ！？でも俺達、こんな高い層まで来たことなんかないぜ?』

『いいんだよ！どうせココは街中だ。圏外、つまりフィールドに出なければモンスターは襲ってこねえ』

『わ、分かったお!!』

『了解でござるwwwwフヒヒwwww』

あ、二十二層から付いて来ちゃったのか。

……まあ、あんなに大声で叫んでたらドコに行こうとしてるかなんて、すぐ分かるものね。

って、そんな事より・・・、

キノ君……

この街の道、分かるのかしら……？

side out・・・

side再びキノ in・四十八層の道

「うわゝ…ん、腹減ったよおう……………」。

「ココ何処だよう……………」。

追っ手から逃げるためにアッチコッチ走り回ってたら、案の定迷
いましたゝ

あばばばばばばば。

しかも走り回ったせいでおなかも減ったし……………。
今丁度昼くらいかあゝ……………？

幸い、追っ手もこの街は詳しくないようで、路地裏に隠れたり、民家に逃げ込んだりしてま「いたぞー!!」…へ？

「おい、アッチに行ったぞ！追え!!」

「もうイヤだああああああああああああああああ!!」
ううう、なんでオレがこんなメに…。

今まで出ていた通りから店の裏手に走り、再び裏道に入ってあまり幅が広くは無い通路を右左、ふと前を見てみると、『名も無き名店』っぽい店があった。

周りを白くて高い石壁に囲まれてて、すぐ居場所がバレるという心配もなさそうだ。

(あの店に、…ダイブっ!!)

丁度高い壁の途切れ目、つまり店の入り口が自分の右斜め横に来た時に、左足の筋肉を爆発させる様に跳躍。見事店の敷地内に入れた。

が。

勢いが付き過ぎていて、よくオープンカフェとかに置いてあるあの白くてプラスチックっぽいテーブルとイス。
そして…、

V e r s i o n 8 - 短気は損気。何事もドツシリと構えて、真実を見極めま

なんかもう、色々とすいませんでしたあああああああ

まあそんな訳で今回のアレはミスリードですwwwフォカヌポオw

ww

キリト×アスナは永遠に不滅ですwwwフヒヒwww

・・・あ、気付いた？

うん。あれオレだよ。

それでは次の更新でお会いしましょう、ばいちゃ！

P S , 更新遅すぎてゴメンね・・・；；

Version 9 - 浮遊城、攻略開始!?! - (前書き)

まさかこんなに間が空くとは……。
申し訳無い……。

今書きあげたばかりです。
胃が痛い。

中三で早くも太 胃散のお世話になってます。

そんな事より早く見せろ？

サーセンｗｗｗ

あ、お詫び的な意味でいつもより長いよ。

どしどし。

Version 9 - 浮遊城、攻略開始!?! -

Side眼がすぐくするどくて、ピカピカと光っている人

眼の前で両手にフォークを握りしめ、一心不乱に眼前に鎮座する四十八層名物、『浮遊城アインクラッド型ケーキ』君は全層食べきる事が出来るか? (正式名称)の単独撃破を試みる人物を見て、想う。

ーーどろしてごうなつた?ーー

ちよつと今日一日を振り返ってみよう、そうしよう。

・ ・ ・

いつも通りの時間に起きた俺は日課の狩りをこなした後、少し早めの昼食を取る為に行き着けの店へと行った。

ここは正に隠れた名店と言える所で、店に来る人も少なく、自然と落ち着いた雰囲気を持っている。そんなところが気に入って、数週間前から俺はここに入り浸る様になった。

取りあえずそんな店でフランス風な昼食を食べ終わり、食後の優雅なコーヒープレイク・・・と洒落込みたいところだが生憎、この店にはコーヒーは置いてないらしい。

なので見た目がコーヒーに似ているという、『コーヒーマドキ』を頼んだ。

注文を受け取ったNPCが持ってきたモノは、見た目コーヒーと言えなくもないものであった。

試しに一口含んでみたが味も普通に売られている少し甘めのコーヒーで、飲んだ後某乳酸菌飲料を濃い目に配合した時の様に、何故か少し喉に残るのが印象的だった。

普段は苦い位の濃度のコーヒーを好んで飲んでいるのだが、しかしまあ、こういった味もキライではないのでそのまま『コーヒーマドキ』とやらを飲みながら、午後の予定や欲しい装備に後どの位で手が届くかなどを、上空にある次の層の地盤をボンヤリと眺めながら考えている時に、『ソレ』は起こった。

一杯目の『コーヒーマドキ』を飲み終わって、二杯目を注文。ついでにNPCにこの店の名物だというスイーツを注文する。SAOの世界でも、注文してから品が届くまでのタイムロスは生じるというか、ちゃんと設定されていて、大体注文したその大きさに比例した時間待たなければならぬ。ので、NPCが持ってきた濃い黒色をした飲み物、『コーヒーマドキ』を口元に傾けながら待っていた。

そんな時に聞こえた、ダンッ！！、と言う何かを思い切り蹴飛ばした時の様な音。

何事かとカップを口元に寄せたまま、顔だけをそちらに向けた。
そして眼に映る、薄茶色の塊……。

……は？

唐突に向かって来たソレに、人並みな反射神経しか持っていない俺は
咄嗟に避けるなどということも出来ず、その状態のままその布を受
け止めた。

カップを持っていたまま《……………》の右腕で……。

194

急に感じる、腕への衝撃。

どうやら布は、見た目以上の質量を持っていた様で。

しかし俺はそのまま押し倒される様な事も無く踏ん張れた……、
んだが。

流石に腕だけにはその衝撃は荷が重かった様で。

腕が揺れ。

手に持っていたカップも揺れ。

結果、カップ内に満タンに入っていた『コーヒーマドキ』を頭から
被ってしまった。

その時、俺にぶつかって下に落ちた布がなにやらモゾモゾ動いて、顔が飛び出した。

そして俺の顔を見るなり一言。

「なんだかすぐくするどくて、ピカピカと光っていたのがいんしよ
う的でした、まる」

意味がわからない。意味がわからない。
なので思わず、

「・・・あ？」

と零してしまった俺は悪くない。

例え、眼の前で（多分）俺の言葉で怯えているヤツがいたとしても、だ。

「許して下さい、許して下さいいいいい！！」

う、ウチには今日生まれる予定の子供が居るんです！

だから、コンクリ詰めだけは！コンクリ詰めだけはああああっ！

「！」

驚くほどの速さで、落下した時の体制から土下座の体制へと移った
うん、間違っている。色々と。

「おい。」

「うひいっ!!」

何故か呼んだだけで怯えられる始末。

そんなに俺が怖いんですかそうですか……。

「まあ、落ち着け。」

俺は何もオマエを取って喰おうとも、コンクリートと一緒にドラム缶に詰めてどっかの湖に沈めようとも、肘んトコの当たるとビリビリするトコを攻撃したりも、タンスの角にお前の小指をぶつけさせたりも、テーブルを脛がちょうど当たる場所に置いたりも、何にも、しないから。」

「何だか悪意を感じる……!?!?」

ちよつと傷付いたのでおちよくってみる。

言葉の節々に抑揚を付け、内容を小刻みにしてに話すのがポイントだ。こうすることで、相手は想像する時間を与えられ、それがどんなことかを知る。

(……あれって、地味に痛いんだよな……)

案の定脛をぶつけた時の事や、小指を打った時の事を想像したのか、涙目になっている。

「まあ、そんなことより、だ。」

「ん?」

「これ、どうしてくれるんだ?」

そういつて俺が指差したのは、たった今俺の頭に咲き誇ったばかりの、黒い薔薇……もとい、『コーヒーマドキ』によって見事に染色された、俺の髪。

『コーヒーマドキ』は何故かやたらと喉に残る感じがしたが、まさかこんな活用方法があったとは驚きだ。

ああ、流石に顔にかかったヤツは拭いてるぞ?

「……とてもよくお似合いですが、何か？」

「…何故コッチを見ないんだ？」

「ソレハアナタ様ノ才顔ガアマリニモカツコイイカラデスヨー。」

「そうか…。」

「ソーデスヨー。」

「いや照れるな。」

あっはっはっはっはっはっは。

「アッハッハッハッハッハッハ。」

「あっはっはっはっはっはっは！」

「アッハッハッハッハッハッハ！」

「舐めるなよ？」

「スイマセン……。」

「はぁ……、まあいい。」

さっさとどっか行け！」

「お待たせ致しましたー！」

「おお、注文してたのが来たk……。」

ウソだろ……。」

注文していた、この店の名物だと言うスイーツ

それは、この『浮遊城アインクラッド』をモチーフにして作られた

ケーキだった……。
しかし、問題はソコではない！

「でけえ……。」

「ほお……。。」

さっきまで俺が座っていたテーブルに置かれたそれは、軽く1メートルを超え、2メートルの域に達していた……。

(ケーキに身長で負けた……だと!??)

ってかどうやって持って来たんだこんなモン!

あきらかにさっきの声女性ウェイトレスのNPCだったよな? な
!?!?)

「……あの、コレ返品とかh」

「ムリです。」

「……へんぴh」

「ムリです。」

嗚呼、NPCの完璧すぎる営業スマイルが、何故だか恐ろしく感じる。

NPCだからそんな事無いハズなんだが……。

「仕方無い……、喰うか。」

ウプツ……見てるだけで胃もたれしそうだ……。」

渋々ながらも席に着く俺……。

だって勿体ないだろ……?

「そうですね……。」

そして俺に続くように、滑らかに俺の隣にイスを持ってきて座る人間弾頭……。

ん？

「いざ、浮遊城の攻略に!!!」

「いや……、なんでお前も喰おうとしてんの？」

「……？」

「いや、そんな『何言ってるのこイツ？』みたいな顔されてもだなあ……？」

「ふっ……、心配は御無用。」

拙者大食いには自信がありましてなあ……。

つい今朝も友人の家で朝食を馳走になった際に、『お前は俺を（家計的な意味で）潰す気か！？』といわれましてなあ。ハ、ハ、ハ、ハ。

「『ハ、ハ、ハ。』じゃねえよ！後その友人に謝つとけ！」

「何を仰る、アレは一種の『ツンデレ』、と申すものにごぞるよ。」

しかし、あんまり素直じゃないので一週間分の食糧をブラックホールで消し去ってしまった……。

我が胃袋というブラックホールで、ね」ドヤア

「ドヤ顔してんじゃねえ！！全然うまくねえんだよ！」
友人が不憫過ぎる！

……ん？しかし、これをどうにかするには……………。

「仕方ないな…。

じゃあコレ全部喰っていいよ。」

「え、マジで!？」

後でくれて言っても遅いからな!？ホントやんないからな!？」

「おーおー、喰え喰え。」

というか食って下さいお願いします。

「じゃあ、イッタダキマース!!！」

そう言いながら、笑顔で自分の頭ほどもあるスプーンを手取る。

(しかし、本気で食えるのか・・・?)

その日、俺は伝説を見る事となった。

side out・・・

sideキノ

顔に笑いを浮かべたままスプーンを徐々に持ちあげていき、浮遊城の一番下、はじまりの広場がある場所当たりに照準を定める。目指すは頂点に鎮座する紅の館。

血でそまつたような朱色は、少々食欲を減滅させるモノがあるが、オレには分かる……。

アレはストロベリーを潰したもので作った、紅いチョコレートだ！

それを非常に緻密に、優雅に。それでいて大胆に組み合わせで作った、正しくお菓子の家…否！

お菓子の館なのである！！

多分チョコとチョコの繋ぎには何も使わず、ただ溶かしたチョコをくっ付けただけ……。

チョコが大^{生地}地に堕ちる事のないように、ただ優しく溶けた部分だけを繋ぎ合わせる様に、余計な部分まで溶かす事なく作られた館。

それでいて強度はシツカリとしていて、もし実物大で作ったのならば大嵐が来たとしても、風に屈す事なく。

嵐が過ぎ去った後、洗浄された空気の中で雨が光り輝くのであろう、そんな美しさを持つ。

だが！

しかし、だ！

時として完成されているものを壊すという事も必要なのである！
大胆不敵に、尊大に。

不気味に堂々聳え立つ紅の館…。

その館に敬意を表し、決して声には出さず、心の中で呟く。

『いくぞ浮遊城

身体の貯蔵は十分か』

戦いの幕が、上がった。

side out・・・

side再び、眼が鋭くて（ry

結論：俺が悪かった。

なんであの時席を立てておかなかったんだ・・・俺・・・！
まあ、いつまでも悔んでいても仕方ないし、一人でこの考えたヤツ
バク：オホン！とても創作的な城を表したケーキと無謀な挑戦者の
戦いを見る事にしよう。

せっかくなんで今回、心内実況も合わせてやろうと思う。けっこう
時間潰せるからやってみ？主に保体とかの時、先生が『二人組作っ
て』とか言い出した時とか、結構使えるぞ？…っていつてるこれ

も既に心内実況な訳だが。

では、実況を始める。

まず、手にスプーンをとったソイツは、あり得ない行動を取った。全長二メートル、全百層からなる浮遊城を相手に、まず足元を崩しに行ったのだ。

確かに戦いでは相手の体制を如何に崩すかがキーとなる。

それこそ、優れた武人でさえ体制を崩されれば、まずは身体を元の状態に戻そうと、一瞬のスキが出来る。そこを突くのがセオリーと言える。

しかし、相手は城。

どうやってもスキなどできあがるハズがない。一体、何を思い足元にいったのか？

その疑問は、即座に解消される事となる。

「ッッッ！！　　そういう事か！」

まさに、息も吐かせぬ疾風怒涛の大連撃。

重心が崩れた事で、コチラ側に倒れてくるかと思われた城であったが、次の一手でその動きが止まる。

いや、ズレる、といったほうがいいだろう。

何時のまにか先程その一撃で決った場所から少し動き、居る場所はケーキ正面やや左。

再び手に持つ大剣が光の速さで動き、大地を掠め取る。城が僅かに揺らいだ事を確認すると、また動き、削る。その繰り返しだ。

そう！

こいつは城の重心を僅かに僅かに、徐々に徐々にズラしていくことで、城が一方方向に倒れるのを防ぐと共に、城に確実に、着実にダメージを与えているのである！

ジリジリとその身体を奪い取られていく浮遊城。

心なしか、削る度にその勢いを増していくスプーン……。

大方、奪い取った大地を自信の強化に使っているのだろう。顔に白く大地の欠片が付いているのが分かる。

チャレンジャーの方へと、追い風が吹いていた。

開戦から、十数分が過ぎようとしていた。何時の間にか自分が手の平が白くなるまで握りしめていた事に気が付く。

こんなに心臓が高鳴ったのは、何時ぶりだろうか。

(此処アインクラッドに来た時ぶり、……かも知れないな。)

あるいは

。

おかしな浮遊城の攻略も、既に五十層も半ば、六十層に差し掛かった時。

このまま館まで攻略されるのをただ待っているだけと思われていた城に、援軍が訪れる。

「ん？ホント何処行つたんだお？」

「知らないでござるwwwしかし、こちら辺で姿が消えたというのも、ヒントと成り得るのでござるwww」

突如聞こえてきた、二人分の声。

その声に明らかに反応する、一人の人物

スプーンを装備したその人は、見るからに震えだした。まるで狼の前に跳び出したウサギの様だ。城に伸ばす腕も頼りなくて弱々しい。

一体何がそんなに恐ろしいのか、分からない。

ただの男の声ではないか。
しかし、本能が、警笛を鳴らす。

その男達を近付かせてはいけない、と。
焦った俺は、戦いが繰り広げられているテーブルの横をすり抜け、
店唯一の出入り口である、石壁の割れ目へと走る。

そこで目にしたものは、明らかにこの層には不相応と言える装備に
身を包んだ、二人組の男。

片方は全身白い装備で、他人をバカにしたような表情の、まんじ
ゆう型の仮面をつけている。

そしてもう一人はバツクパックを背負い、額には唐草模様のバンダ
ナ。顔には分厚い、いわゆる瓶底メガネをかけている。

なんてことはない。ただの観光客のようなものだ。

何故、こんな奴らに危機感を覚えたのか、自分が不思議でならな
かった。

しかし、まんじゆう仮面男にかけられた声によって、その認識は正
しかったのだと知る。

「すいませ〜ん。コツチに茶色のコートに身を包んだ、小柄なプレ
イヤーがこなかったですかお？」

確信。

こいつらは、アイツを狙っている。

思えば、アイツが店に入ってきた時も様子がおかしかった。

それは、こいつらに追われていたからなのではないか？

全てが繋がったかのような気がした。

「お〜い、聞いてますかお？」

「あ、ああ。来なかつたな。」

「…そうですかお。」

ところでここは、何の店なんですかお？」

「なんてことは無い、ただの喫茶店だ。」

「ふ〜ん…。でも、如何にも穴場って感じがするですよね。」

これは穴場スポットーとしてのやるおは、見逃す訳にはいかないお！（キリッ）」

何故か、急に張り切りだした白まんじゅう。

しかし向こうには今、誇りをかけて戦っている奴が。

目だけを動かして戦場の様子を伺えば、先程よりも確実にペースが落ちたが今も尚、その手に握る大剣を動かし、浮遊城の身体を削り取っている者の背が見える。

その背中は体格だけではなく、その心を映しているかの様に小さく、儂く、か弱く見えた……。

（！）……こんなか弱い子が…俺よりも小さな子が…身体張ってるんだ

男の俺が行かない理由が、何処にある！？

・・・とかなんとか実況してみたんだが。

(実際、そこもで身体張る義理も無いし？)

…まあ、ちょっと位は止めといてやろうかな？…？

「さっそく調査だお！…っでどうしたんだお？」

「あ、あゝ…。じ、実はココ、夜しか開いてないんだ。」

「ほほう？特定時間しか開かない店…これはイベントのニオイがするお！」

「フム、では夜になるまで時間を潰す事にするでござるwww」

おお、なんか帰っていった…。

さて、視線を元にもどすと、コチラも最終局面に差し掛かっていった。

舞台はいよいよ八十を超え、九十を飛び出し、百に移る。

こうなるともう止められない。

瞬く間に百層の土台を喰い尽し、残るは紅い館。

挑戦者は満ち足りた顔をして、ソレを口へと、運んだ。

「じゃあ、俺はコレで。」

「ありがとうなー、目的地まで送ってもらって。」

「や、いい。(あのままじゃあお前どこ行くか判んかったし...)」

結局、おかしな浮遊城を完全制覇したコイツは、店でなんかやたらとデツカイトロフィーを貰った後(あのケーキを一人で喰うのが条件らしいイベントが有ったらしい。ムリだろ...)、去って行く。ハズだったんだが、わざわざ方角を聞いてきたにも関わらず、正反対の方向に進んで行こうとしたので、仕方なく、そう!し・か・た・な・く!近くまで送っていく事にした。他意は無い。

「あーリーがーとーなー!!」

背後から聞こえてくる声に振りむくと、子供の様に大きく手を振るその姿に思わず苦笑してしまう。

「おう！気をつけるよ！」

そう返すとソイツは僅かに身を震わせて周りを見た後、一目散に駆け出していく。

…コケそうで危なっかしいコ「ぎゃふ！」…案の定、コケたらしい。

(子供みたいだな…。)

そう思いながら見ていると、すぐに立ち上がり、今度はゆっくりと走っていった…。

「…うし！俺も帰るか！」

・
・
・

部屋に備え付けられている洗面台の前で、頭を濡らしている影が一つ。

それは先程、見事に頭から『コーヒーマドキ』を被った人物であった。

「ふう、やっと落ちた…。」

にしても着色力有りすぎだろう…アレ…。」

やっと頭に咲き誇っていた黒い薔薇がとれた様で、その少年、と言つべきだろうか？ の頭は、少
いつもの様に、茶色に戻っていた…。」

そして少年は、呟く。

「そっいや、聞いてなかったな。」

あの娘の名前。」

結構カワイかったし…。

sideout・・・

Version 9 - 浮遊城、攻略開始!?! - (後書き)

皆気付けた？

てか、分かった？WWW

うん、たぶん分かんなかっただろWWW

力量不足的な意味で。

orz

はい、アレはグラブさんです。

前話で出て無いつて思いだしてから、急に出そうと思ったんだW
キャラがWWWワカンネWWW

∴胃が痛くてテンションが変だ。

更新止まってたから、見てくれてる人消えたかな(´・`・´)

更新は止めないけどな！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3721v/>

元々読者で今オリ主！？

2011年11月21日21時40分発行